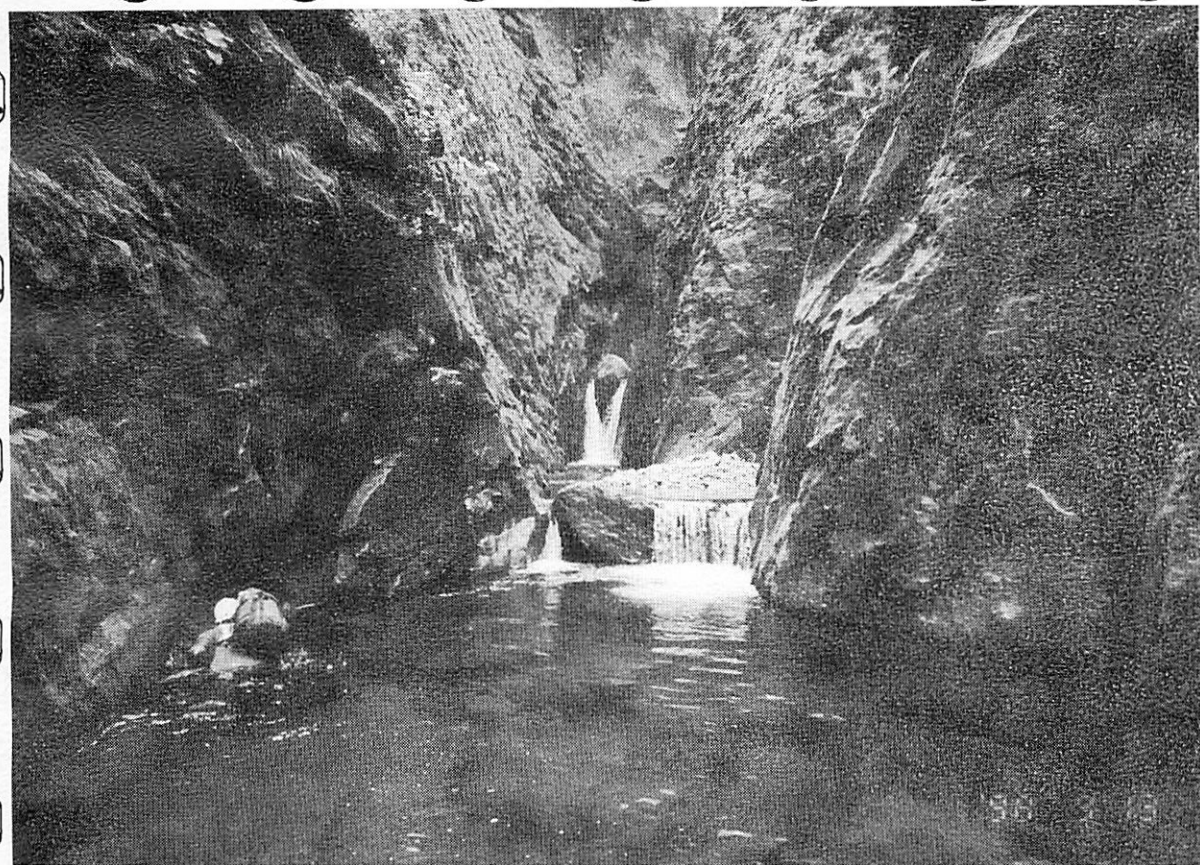


北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V 30号

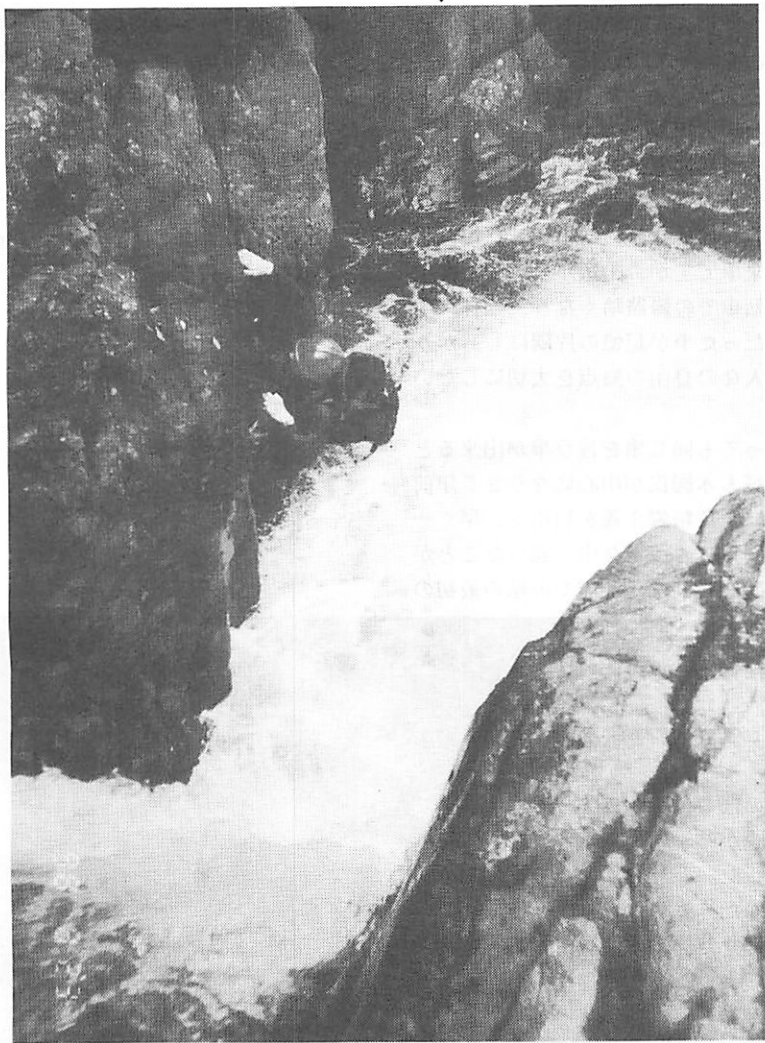
1998年7月~9月



ACC-J 茨城

目指せヒマラヤ!!

Rock and Valley 98' 夏 No30



滝川本流

《Photo by, Motozu》

雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録集
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

Come Back OB and Welcome Young Climber

『なんで山登るねん』…。高田直樹氏のエッセイ集でベストセラーのシリーズ集ですが、茨城弁で言う『なんで山登んだべ』になりスマートさに欠ける言葉になってしまう。しかし山を登らない人から見ると大きな疑問の一つであろう。エベレストに消えた英国の登山家マロリーは『そこに山があるから』と答えて後世に伝説化された有名な言葉があるが、これを読んでいるあなたは『なんで山登んだべ』と聞かれたら何と答えますか？。おそらく百人百葉の回答があると思われます。ある人は目標を持って自己研鑽の為、ある人は写真撮影の為、ある人はキノコ&山菜採りとそれぞれが山を楽しんでいる事と思う。

山好きの人にとって最初に登った山はその人にとって山登りの原点であり、記憶に残っている事でしょう。私にとって最初の山登りは中学生の時に登った筑波山です。37年前の出来事です。山頂から眺めた関東平野の広大さと、自転車での帰路暗くなり、松林の中を走る砂利道で不安だった事が記憶の片隅にしっかりと残っています。個人々の登山の原点を大切にしたいと思う。

これは山岳会にとっても同じ事を言う事が出来ると思う。ACC-J茨城も本図氏が中心になり25年前に発足したが、当時は少数精鋭主義を目指し、早く一人前のクライマーになるべく毎週山へ通ったことが記憶に残っています。ACC-J茨城での私の最初の山行は裏妙義での沢登りでしたが、その後岩登りのゲレンデ通いが毎週続き、谷川岳、冬の八ヶ岳そして会の仲間も少しずつ増えて、冬の穂高岳へと足をのばし、ACC-J茨城の実力が伸びた時期でもありました。当時に『なんで山登んだべ』と聞かれたら『山が好きだから』と答えた事でしょう。

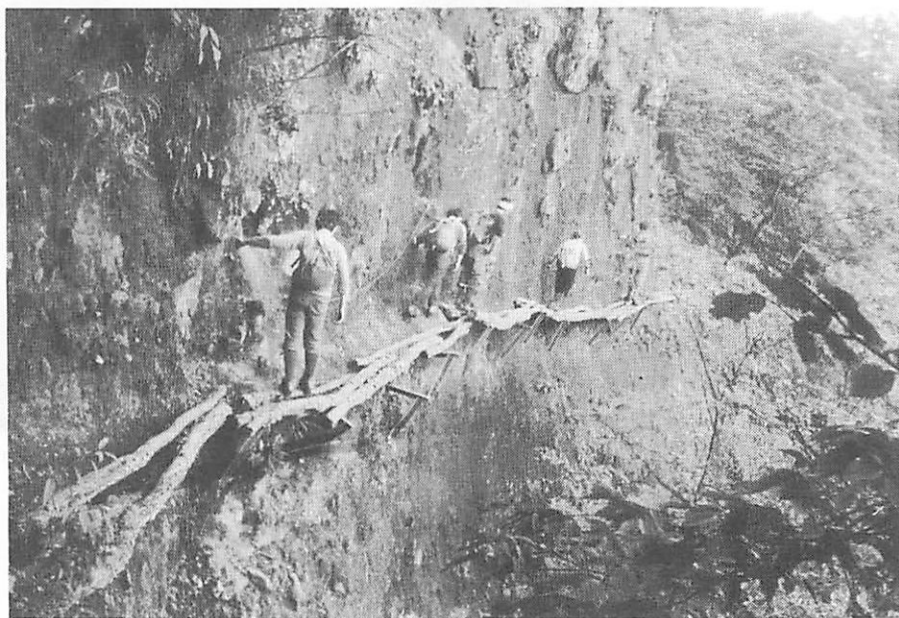
現在、百名山ブームでこの山も中高年の登山者が多いと耳にする（自分達もその仲間であるが……）。若い頃から継続して登山を実践している人、若い頃登山をしていたが途中中断して、中高年になり登山を再

開した人、中高年になり登山を始めた人とタイプは様々であるが。共通しているのは山が好きなこと。今夏パキスタンのガッシャブルムII峰に50歳以上の登山隊、その名もシルバータートル隊が挑み、登頂者の一人は61歳という。中高年パワー恐るべし！！。ACC-J茨城のOBも山が好きな事には人一倍の方が多いはず。現在は様々な事情で山から遠ざかっているOBに山へ復帰して欲しいと思う。

現在、ACC-J茨城の活動は停滞期にあると感じる。これを中年パワーで打破し、更に新入会員を迎えてACC-J茨城の活動が活発になり、近い将来ACC-J茨城のシルバータートル登山隊で海外遠征の夢を描くのは小生だけではないと思う。

Come back OB and Welcome young Climber. !!

(木村 一)



初めての山行……赤岩基部のトラバース……

《目次》

1998年 夏号 7～9月 ACC-J 茨城

Come Back OB WelCome Yonug Climber	・・・ 1
集会報告	・・・ 3
山行報告	・・・ 4
笛吹川・鶏冠沢左俣	・・・ 5
錫杖岳前衛フェース左方カンテルート	・・・ 6
《はじめちゃんの思い出日記(part5)》	・・・ 7
谷川岳・一の倉沢・南稜	・・・ 8
坪川・三重泉沢	・・・ 8
黒薙川・北又谷通行～親不知	・・・ 9
大峰山塊・白川又川本流～火吹谷	・・・ 12
利根川本谷一沢の王道を行く一	・・・ 14
秩父・滝川本流	・・・ 17
坪川・三重泉沢	・・・ 18
称名川・雄穀谷・ザクロ谷	・・・ 19
幽の沢左俣滝沢大滝	・・・ 23
《はじめちゃんの思い出日記(part6)》	・・・ 24
友好山岳団体の月報・会報・その他	・・・ 25
編集後記	・・・ 27

表紙写真…ザクロ谷出合の漕を泳ぐ

集会報告

(於、スカイラークガーデン)

-----【 7 月 】-----

7 月 1 日

出席者 本図、菊地、木村、古山、笹平、生井、坂本(副)

7 月 15 日

出席者 本図、古山、菊地、木村、鯉河、生井、笹平、高木

-----【 8 月 】-----

8 月 12 日

出席者 本図、木村、菊地、遠藤、中島

8 月 26 日

出席者 古山、菊地、木村、笹平、遠藤

-----【 9 月 】-----

9 月 9 日

出席者 本図、古山、菊地、木村、中島、笹平、遠藤

9 月 24 日

出席者 本図、古山、木村、鯉河、菊地、笹平、生井

山行報告

《 1998年 7月～9月 》

---【 7月 】---

7月 5日	御岩山岩トレ	L 本図、坂本(畠)、高木
7月 12日	笛吹川・鶏冠沢左俣	L 本図、菊地、水島、松原
7月19～20日	錫杖岳・前衛フェース左方カンテ	L 古山、本図、笹平
7月 26日	谷川岳・一ノ倉沢・南稜	L 本図、坂本(畠)、高木
7月26～27日	浮川・三重泉沢	L 名雪、木村
7月27～31日	黒雉川北又谷	L 古山、中居

---【 8月 】---

8月6～9日	大峰山塊・白川又川本流～火吹谷	L 古山、本図
8月12～16日	利根川本谷	L 古山、笹平
8月 23日	秩父・滝川本流	L 本図、高木、遠藤

---【 9月 】---

9月12～13日	浮川・三重泉沢	L 木村、遠藤、仲川、名雪
9月13～15日	称名川・雑穀谷・ザクロ谷	L 本図、古山
9月 20日	幽の沢左俣滝沢大滝	L 古山、笹平

鶏冠沢・左俣

1998. 7. 12

パーティ L 本図一統、水島幸男、松原丈夫、菊地光夫

今回の山行は、日曜日が参議員の投票日となる為に不在者投票を行ない、清き一票を投じる。相棒の本図氏は不在者投票でしか選挙は行なった事のない人である。

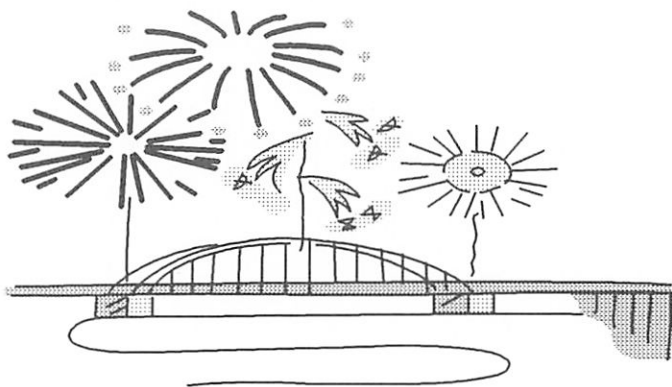
今回行く秩父方面は以前だと、常磐道を抜け中央高速と利用すると2名の山行だと金がかかったが、雁坂トンネルが出来たため、一般道でも行けるようになったので貧乏人の私には有り難い。メンバーは東京より水島氏、松原氏の2名で東京グループ、茨城グループとして現地集合とする。トンネルの下の立派なトイレ前で集合になっていたが東京グループは所在が不明であった。しかし、それより下る事700～800m位の所に道の駅があり、ここの立派なトイレ前に車が止まっており、既に2人は酒盛りが終って水島さんはもう酒が入らない状態になっていた。でも合流後（12：30頃より）、1台の車に集まり酒盛りを始める。水島氏の話の中で約30年ぶりに古い山の友に会った話を本図氏にしていた。本図氏と高橋氏は同期でACC-Jに入会したようであった。高橋氏は現在は寿司屋を経営しているので一度飲みに来てくださいと水島氏

に声をかけたそうです。

翌朝、6：30発で鶏冠沢の出合に向かう。鶏冠沢出合、7：30頃到着。メットとザイルを出し入渓。沢は悪くもなく順調に1時間位行くと、菊地の右足の溪流シューズが口を明けバカンバカンの状態になり、本図氏が溪流シューズに穴を空けて紐を通し結ぶが…、長くは持たないのでこれより敗退になった。この溪流シューズはよく持った方で、3～4年は持ったと思う。

敗退という事でこれから東京へ行って山道具を購入してから、昨夜話していた高橋氏の所で一杯やろうと話がまとまる。そうと決まると下りは早く“あっ”という間に出合に着き、駐車場に戻った。駐車場到着は12時頃であった。これより、ICI石井スポーツへと向かう。その後池袋にある秀山荘で買い物をして、平井の駅の前の近くにある“いずみ寿司”で握りを食べながら一杯飲んで夏の夕方は日が長くまだ明るいうちに東京を出て茨城に戻った。

(菊地 記)



錫杖・左方カンテルート

1998. 7. 12

パーティ L 古山正文、本図一統、笹平孝

駐車場は何処も満車状態で、槍見温泉の橋を渡って右側にある駐車場になんとか車を停める事ができた。

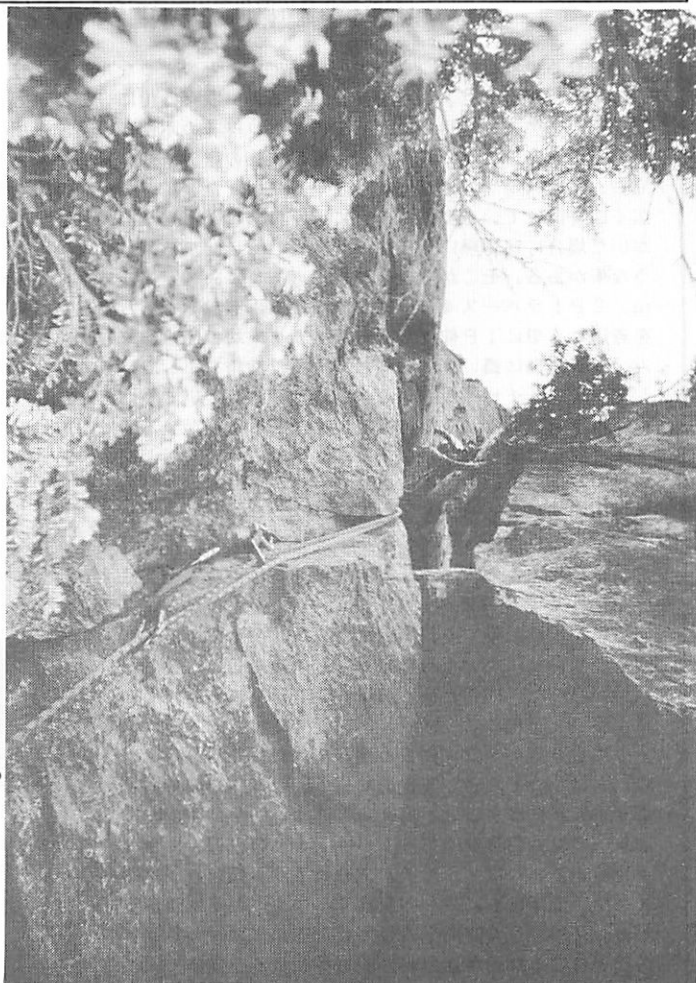
登山口は、温泉の脇にある古い電話ボックスが目印でそこから登山道へ入って行った。急登が続いて、2時間ぐらいで錫杖沢出合に着いた。すでにテントがたくさん張ってあったので空いている場所は無かった。少し平らなところを見つけ、そこを整地してテントを張る事が出来た。荷物を詰め替えて、さっそく取り付けへと出発した。途中で水を汲もうと思っていたら、取り付けまで来てしまった。岩から少しづつ水が出ていたので、ペットボトルに入れて何とか一杯になった。

先行のパーティがいたのでちょうどよかった。が、しかし、そのパーティには初心者のおばちゃんが混じっていたので1ピッチ進むごとにかなり待たされた。3ピッチ目の所に来た時は、辺りは人で溢れて下から登ってくる人もいて、大渋滞になっていた。結局、そのおばちゃんは3ピッチ目の途中で登れなくなって、そのパーティは諦めて降りる事になった。先行パーティがいなくなったので一気に登れるようになった。最終ピッチのフェースは、ホールドが剥がれそうで一番緊張した所だった。

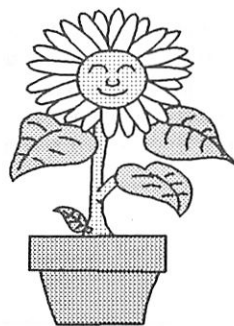
下りは、烏帽子岩から右俣沢を落石に注意しながら降りた。途中、3ヶ所懸垂下降した所があったが、6mほどの高さしかなく慎重に行けばロープを使わなくても行けそうだった。出合までは思ったより遠かった。

翌日は、天気が余り良くなかったので、午前中のうちに駐車場へ戻って、橋の下にある露天風呂に入って帰った。

(笹平 記)



核心のオフウィズクラック



はじめちゃんの思い出日記〈Part 5〉

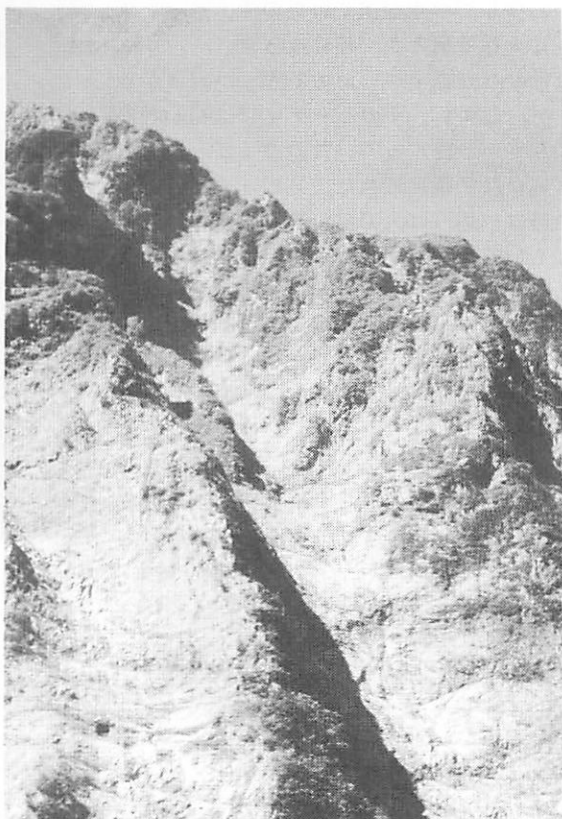
(越後駒ヶ岳佐梨川金山沢奥壁第4スラブ〜ダイレクトスラブ)

山を登るのにどのような方法で登っても、どのようなルートを登っても、共通して言えるのは高みへの憧れ、未知への臆れがある事だ。それを満足させる為に我々は山に登るのかもしれない。ここ佐梨川金山沢奥壁は谷川岳一ノ倉沢を凌ぐスケールを持ちながらそのアプローチの不便さの為、未だに秘境という感じがする。周辺の壁、スラブは登り尽くされているが、我々にとっては未知の壁、未知のスラブである。金山台地で身支度を整えて上部の雪渓に降り立ち、第4スラブの取り付けへと下っていった。第4スラブの末端まで来て愕然とした。シェルンドが深く、そして広く口を開けている為にスラブに取り付く事が出来ない。やむなく更に下降するが、もしこのパーティに土浦のK氏がいた場合には即座に天罰が下り敗退していただろう。普段の行いが良い我々を神は見放さなかった。1ヶ所渡れそうな所がある。そこから約3ピッチのトラバースで第4スラブに入れそうだ。1Pブッシュを掴んで強引に登り30m。2Pトラバース40m。この頃から雨が激しく落ちてきて第4スラブが見る間に滝に変わっていく。ここで雨具を着用して更に1P伸ばして第4スラブ末端の流水際で様子を見る事にした。雨は小降りになったが雲が低く垂れ込み、郡界尾根は濃いガスに隠れて険悪な様相を呈している。無為な時間が過ぎ去っていく中、意を決して登攀を続行し更に1ピッチザイルを伸ばすが、壁が濡れている為に悪く感じられる。再び雨が激しく降り出した。ハーケンを打ち懸垂下降で下るが、第4スラブを流れる水量が見る間に増加してくる。今日の登攀を諦めてクライムダウンと懸垂下降で雪渓に降り立ち、金山台地に帰り着く。天候が回復しそうにないので、今回の登攀を諦めて荷物をまとめて下山の途に着くが、ものの5分と下らないうちに天候回復の兆しが見えてきたので、そこでマットを出して昼寝をきめこむ。明日の天候回復に期待をかけて今夜は金山台地でビバーク。

翌朝、小鳥の囀りで目が覚め、ツェルトの外を見ると雲一つない快晴だ。今日は絶対に登れるだろう、粘ったかいがあった。昨日と同じ箇所からスラブに取り付く、5:20。下部4ピッチは昨日試登しているのだから駆けるように登り第4スラブに入る事が出来た。第4スラブは昨日とはうって変わって快適な岩で、ツルベ登攀で順調にザイルを伸ばす事が出来る。途中ハーケンが少なく、ピレービンも自分達で打ってパートナーを確保。カラカラに乾いていればノーザイルで登れるかも知れない。第4スラブ上部は右にルートを探り、中央バンドに這い上がる。7ピッチ3時間半の登攀。ここからはダイレクトスラブを登るか否か迷うが、茨城へ朝帰りを覚悟でダイレクトスラブに取り付く事にした。ダイレクトスラブ下部の4ピッチは乾いた快適なスラブである。5Pブッシュの中を強引に腕力登攀。6P濡れたカンテ状のところから急な草付。7P急な草付とブッシュを登ると突然郡界尾根に飛び出す。11:20。7ピッチ約2時間の登攀である。かすかに踏み跡のつけられた郡界尾根は左側はスッパリと金山沢まで切れ落ち、右側はオツルミズ沢にどこからでも降りられそう。ブッシュを掻き分け、灌木を跨ぎ、いい加減嫌になった頃、家ノ串尾根の下降点に着く。この下降点にACC-J茨城のペナントを結び、ブッシュ&灌木を掴みながら落ちるようにして下降。

下部の草付スラブは7回の懸垂下降で金山台地に帰着。ガッチリ友情の握手。15:30。

満足感で一杯になったザックを背負い、マメの出来た足を引きずりながら金山台地を後にした。



金山沢奥壁第4スラブ

1978年7月23日〜7月24日

本図一統・木村一

谷川岳・一ノ倉沢・南稜

1998. 7. 26

パーティ L 本図一統、坂本恵美子、高木博行

初めての一ノ倉沢に天候不良の中、下館を出発するが、途中雨が降っている処もあり気分が冴えない。まるで自分の体調のようだ。酒の飲み過ぎで胃がもたれ体がだるい。一ノ倉沢出合に着くと明日は朝が早いので小宴会も早々に切り上げ寝ることにする。

翌朝、目が覚めるとなんと車の外は小雨模様で他のパーティも出発を躊躇しているようだ。本図さんの話だと一ノ倉の岩は濡れると滑り危険らしい。それを聞いて胃がますます重くなりムカムカしてくる。自分の不摂生を天候のせいにする。しばらくするとテールリッジをクライマーが登っていくのが見えた。雨もどうやら止んだので我々も出発することにする。

本谷はすでに雪渓が切れていてヒョングリの滝を高巻き雪渓上に懸垂下降する。雪渓を対岸に渡りテールリッジに取り付く。テールリッジを登り烏帽子奥壁の下をトラバースし、南稜テラスに到着。烏帽子沢奥壁の下は落石があり危険らしいが天候不良の為クライマーの姿はなく安全に通過できた。自分はすでにアプローチにてバテバテ、南稜テラスについて一安心。対岸には滝沢第三スラブが迫り上がっているが、ガスで上部は視界がきかない。いよいよ登攀開始。本図さんのリードでフェースからチムニーへと登っていくがやはりゲレンデとは違い簡単なピッチでも緊張するがビレー点にはたくさんのピトンが打ってあり安心だ。馬の背リッ

ジは高度感があるピッチらしいがガスで周りの景色がよく見えないので高度感を感じない。南稜はホールド、残置ハーケンともたくさんあり過ぎて何処に登ろうか迷ってしまう。最終ピッチのフェースでトップを変わってもら。ダブルロープでのリードは始めてなのでロープの流れに気をつけながらランニングビレーを取って行くが、後1mの所でホールドが濡れていて滑りクイックドロウを損でしまった。フリーのピッチでA0をやってしまった悔しさで我を忘れZクリップをしてしまった。セカンドの確保でロープが流れず苦労するがなんとか終了。すぐ横の6ルンゼを南稜テラスを目指し懸垂する。途中ロープが引っ掛かり本図さんが登り返すアクシデントはあったが無事南稜テラスに帰還し、正面に第三スラブ、隣に烏帽子奥壁を眺めながらの昼食となる。

さて、ここからが自分の核心部の始まりだ。山で嫌なものとか聞かれば即座に毛虫と下りと答える。テールリッジでは腰が引けてソロソロ、雪渓の下りでは滑りそうでドキドキやと対岸の岩場にたどり着き、ほっと一息。そして一ノ倉出合へと急いだ。

一ノ倉出合(8:00)ー南稜テラス(10:00)ー終了点
(13:00)ー一ノ倉出合(17:00)

(高木 記)

浮川・三重泉沢

1998. 7. 26～27

パーティ L 名雪博二、木村一

浮川と書いて「タニガワ」と読むらしい。片品川の支流でその源流部は錫ヶ岳～皇海山まで幅広く、かつては関東の黒部とまで呼ばれた谷である。その中で三重泉沢は本流の三俣沢にも劣らない流程と懸瀑・滑滝がある谷として知られている。

今回は三重泉沢の広河原から上部を遡行する予定で、名雪氏と浮川に向かった。関越道を走行途中激しい集中豪雨の為明日の遡行が危ぶまれたが、国道120号線から浮川集落にかかる頃には雨もあがり、何とか入沢が可能になり期待に胸が膨らんできた。林道途中にはゲートがあり堅固な鍵がかかっているが、通行手形をもっている我々は難なく通行する事が出来た。もしこの谷に入沢する場合には通行手形を持参した方が良かったろう。林道の終点平滝にはかつて集落があり、小

学校もあったらしい。その面影がある場所で仮眠をとり、翌朝6:00出発。平滝からしばらく林道歩きが続くが、途中アブの集団に悩まされた。林道終点付近に左から入ってくる小沢に入り、さらに踏跡を辿り約1時間で小さな峠を越し、更に20分位下ると三重泉沢広河原に着く。広河原で小休止後、身支度を整えて遡行開始。広河原から程なく二俣に着くが、左俣(アザミ沢)の方が水量が多い。我は右俣に入り夕食のおかずを調達しながら、これを左から右から越えて上部の二俣に出ると懸瀑も終わりを告げ、源流部の面影が感じられてくる。右俣をしばらく遡行するが上部には滝がありそうもなく、時間も15:30を過ぎたので下降を開始した。

遡行途中に、二俣の上部でゴルジュ状の所を越した

所に天幕を設営しておいたので、今宵はここを一夜の宿として、焚き火を囲みながらの盛大な宴で三重泉沢の夜は更けていった。ここ三重泉沢には亡霊が出るとの噂があるが、かなり酔いが廻った我々には全て亡霊に見えてしまうので始末が悪い。しかし谷深い沢の中にいると時間がゆっくりと過ぎてゆくのが感じられるのは気のせいか……………。

翌朝テントを打つ雨の音で目が覚めたが、この空模様では今日の行動は諦めて遅い朝食を取り下山開始。途中、二俣から左俣を覗くが、左俣の方がゴルジュが発達しているように感じられる。いつかは入ってみたい沢の一つになってしまった。

(木村 記)

黒薙川北又谷遡行～親不知へ

1998. 7. 29～8. 1

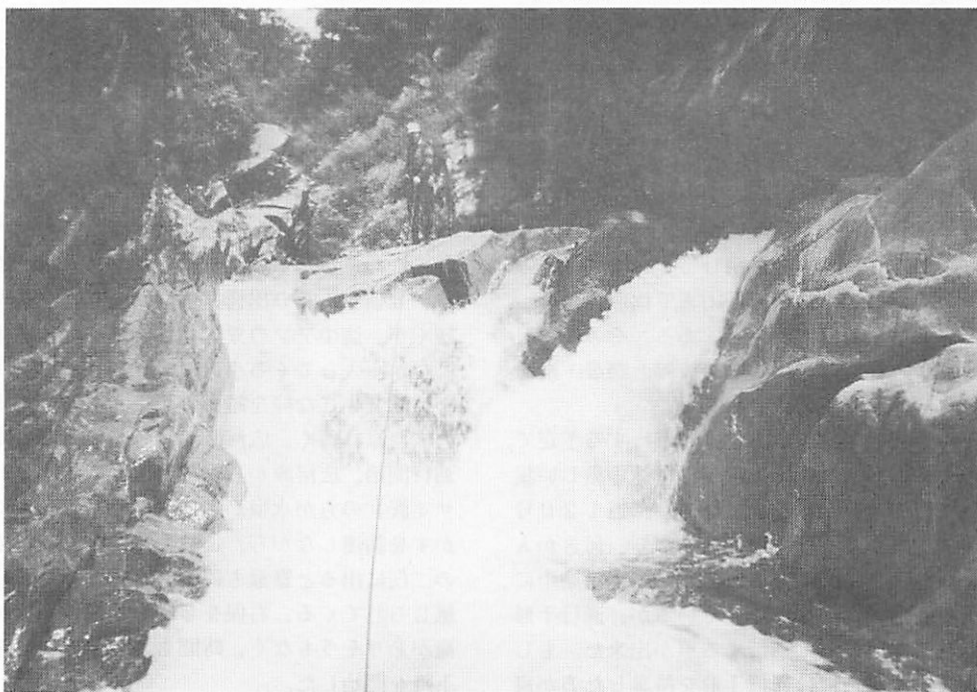
パーティ L 古山正文、中居康展

今年の夏休みは沢登り、さて何処に登ろうかということで北又谷の計画が持ち上がった。時期的には梅雨明け10日になるであろう7月末から8月はじめ、本来なら天候が最も安定する時期である。

諸般の都合で出発は7月28日、月曜の午前中という事になった。昼間に国道50号を走ることは滅多にない。そのまま関越道から北陸道を経由し、朝日インターで高速を降り、泊の駅前に到着する。入山の方法を考えているうちに雨になった。現地での天気予報では、曇り時々晴れ、所により一時雨という極めてあいまいな予報で、これが週末まで続くようである。どうやら西日本の上に居座る低気圧とそこから日本海にのびる前線が悪さをしているようだ。泊駅から出発しても、小川温泉から出発してもタクシー代は一律1万円ということなので、タクシー会社の駐車場に車を置かせてもらい、泊から出発する事とした。晩飯を食って

荷物をまとめ、北又小屋までタクシーではいる。天候は安定しないが行ったその場で判断するしかない。タクシーが北又小屋についた頃から雨足が強くなった。明日が思いやられる。

朝4時、まだ雨足が強い。この調子ではとても入山する勇気は出ない。北又小屋のおじさんの話では数日前に釣りに入ったパーティが事故を起こしたとの事。へつりの途中で落石に当たったとの事だが、入山前に聞いて気分の良い話では無い。雨は昼前に上がった。午後は小屋の周辺を歩き回った。北又ダムは95年の水害でだいぶ浅くなり水位が低いときには小屋の前の屋根を少し高巻けは入溪できるとの事であった。北又ダムは夜間に水を貯めて、昼間に発電用に放水するというので、明け方は水位が上がるらしい。一見このルートは楽そうだがあまり確実ではないのでやめた。日差しも出てなんとなく明日は登れそうな気配が出て



北又谷…長持淵を左岸から越える

きた。谷間のせいかラジオの天気予報もろくに人らない。ビールを食らって早々に寝た。

夜間は猛烈な蚊の攻撃でろくろく眠れなかった。天気は朝から良いようだ。ひょっとして梅雨明けしたのかも、と淡い期待をいだく。今年の山溪では越道峠から下降するルートが紹介してあったが、今回は朝日岳への登山道を途中から下って入溪することにする。2合目から北又谷へ下降するが、ガイドでは支尾根の踏み跡を下り、途中からマグリ谷へ入ることになっている。高桑氏の本では直ぐにマグリ谷に下降した方が楽だということでこの入溪ルートをとった。マグリ谷の最後でトラ紐が付いている所があったが、特に問題なく長瀬の手前に降り立つ。

長瀬は腰までの渡渉を繰り返して難なく越えた。河原は割合に平凡で、古い記録にあるような泳ぎを交えて越えるところはない。魚止めの滝は大きな淵になっており、右壁をザイルを出してへつる。滝上はすぐに暗いゴルジュになり、ザイルをだして次々に越えていく。すぐにうわさの大釜になる。釜の深さは測りしれず、深い緑色の水をたたえている。ガイドでは泳ぎが達者でないと難しい、と書いてあるので最初は高巻くつもりであったが、1回はチャレンジしてみようと、泳いで取り付いた。釜の巻き返しに乗って左側のスラブに取り付き、滝の流れに持って行かれる前に這い上がった。天気も上々でペースも上がる。すぐに恵振谷出合いに付く。先日の事故パーティのテントがそのままになっており、何とも生々しい。又衛門滝は登れないので左岸を高巻く。恵振谷に50メートル程入ると、あ

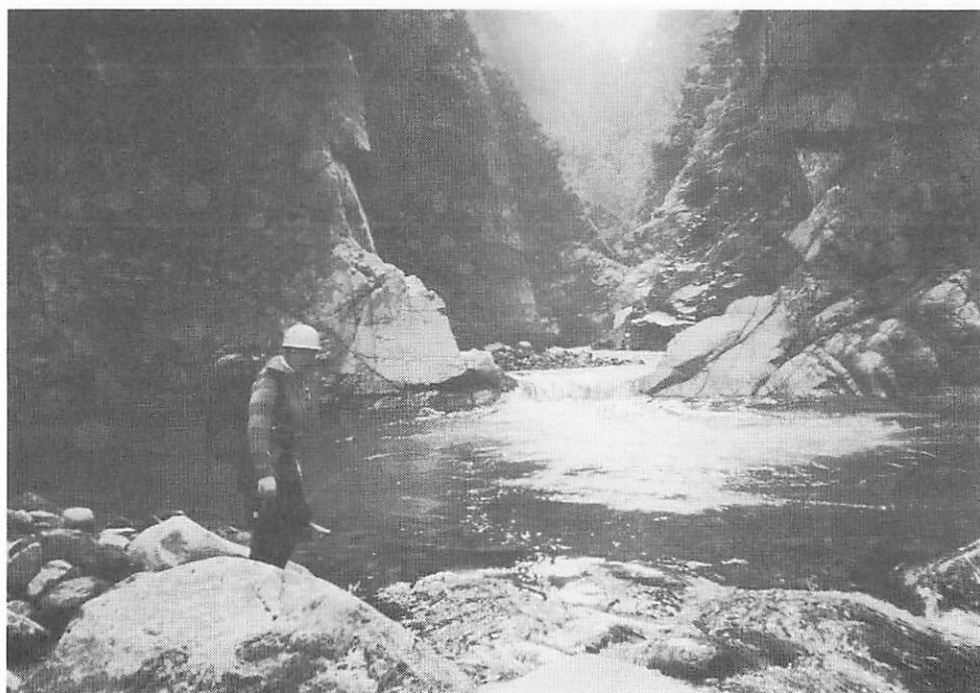
まりははっきりしないが小ルンゼがあり、途中ザイルを出しながら登る。藪こぎをしながら下降点を探す。古い残置シュリングがあり、30メートルいっばいの懸垂で沢に降りる。豊富な水量で磨かれた美しいゴルジュが連続し泳ぎ、へつりを交えて進んでいく。やがて、滝にルートをふさがれる。これは今年の山溪のガイドで、深瀬氏がザイルトラバースの後、滝頭に飛び降りていたところのようだ。確かに水平クラックに錆びたハーケンが打ってあり、これを支点にしたのだろうかとても恐ろしくて使える代物ではない。ここは右側から大高巻きする。上部ブッシュ帯にはいるまでは悪い草付きでザイルを出して、ザックは荷揚げした。暑い藪こぎで下降点を探す。谷は側壁は急峻であるが、その上は比較的なだらかな台地になっており、登ってしまうと下降のポイントを探すのが難しい。懸垂下降で沢におりる。ゴルジュがいやというほど連続する。午後になると疲労もたまり、谷の美しさを愛でる余裕はなくなってくる。やがてポツリ、ポツリと雨が落ちてきた。こうなるとゴルジュの中にいるのは増水が怖い。中瀬の手前が、今日のビバーク地になりそうだ。河原よりも少し上がったところにツエルトを張る。雨は本降りでも勿論焚き火なんて出来はしない。おまけに雷も光っている。やはりまだ梅雨は明けていないのか。翌朝目覚めてもまだ雨である。入山の時点で1日余計につかっているのが最悪の場合は予定日のうちに下山できない可能性が出てきた。ここからはどうやっても人里に出るのに2日はかかる。朝飯を食べて横になっていると、薄日が射ってきて晴れ間ものぞいてきた。朝



大釜を泳いで越える

に比べると水量も減ってきている。とにかく急いで出発である。すぐに中瀬になる天気は回復傾向で、夏の日差しが照りつけ始めた。こうなると現金なもので、楽しみながらの遡行がはじまる。白金滝の高巻きは下降点に分かりやすく容易であった。すぐに長淵であるが、泳ぎ少々で突破できた。ここの最後の滝は一見右から登って滝上に飛ぶのが容易そうであるが、左側から簡単に登れる。そして最後の難所、三段の滝である。山溪や高桑氏の記録にある悪いルンゼは、そのルンゼの少し手前から草付きを高巻いて、ブッシュを5メートルほど懸垂してルンゼ内に降りた。おそらくルンゼ自体を登るよりもこの方が容易であろう。藪こぎを繰り返して不明瞭なコル状を越えると、ブッシュの中に懸垂ポイントがあった。この先は若干の岩登りがあるが、嫌らしい高巻きは終わる。だんだん沢の側壁が低くなり、巨岩帯を越えると思ったよりもあっさりと黒岩平についた。ここは快適なビバーク地である。ツェルトを張って、焚き火の準備をする。古山氏は夕食のおかずを釣りにいったが、今回は餌がほぼ全滅状態であったことと、雨であまり時間もとれなかったことが重なり、ついに岩魚が食卓に上ることはなかった。この日も夕方からは雨である。ツェルトは河原の一番高い所に張ったのでまず大丈夫と思っていたが、焚き火は増水ですぐに消えてしまった。あっという間に増水して、つい数時間前まで歩いていた河原が水没してしまうのは見ていて恐ろしいものである。ここまでくれば黒岩平経由なら1日で人里までたどり着ける。なんとか最悪でも予備日をオーバーせずにすみそうである。

明日の天気良ければ、最初の計画どおり北又谷の最源流を詰めて犬ヶ岳に登り、親不知に下降する事とした。翌朝は高曇りの天気であるが、この先大した悪場もないことからんびり出発する。猿ヶ滝、宗八郎滝は問題なく越え、広い河原を進んでいくと、ようよう稜線が見えてくる。今回の山行はちなみに標高差は700メートル程と、行程が長い割には垂直距離はあまりない。源流部最後の二股で一服していると、またまた雨が降り始めた。今回の雨は結構な土砂降りであるが、これだけ源頭に近づいていると鉄砲水の心配はない。しかし、二股からは結構手応えのあるゴルジュと滝が続き全く侮れない。しかも雨が降り続けているため水量も馬鹿にできないくらいに増えてきた。おそらく晴れた日にはちょろちょろとしか流れていないだろう滝が、水量が多くて登れないのだ。地図上では1270メートルのコルがすぐそばなので、稜線に出れば踏み跡くらいはあるだろうと、草付きから藪をこいで沢を離れた。確かに稜線はすぐそばであったが、踏み跡らしいものは全く無い。雨が降りしき中、地図と磁石を頼りにハイマツの猛烈な藪こぎを続けた。悪夢のような藪こぎの末にようやく登山道にたどり着いた。犬ヶ岳の山頂から少し下ったところに、梅海山荘がある。ここはいわゆる避難小屋のようなもので、残念ながら念願のビールは売っていなかった。しかし今夜はツェルトではなく、雨で全身ずぶぬれの体を乾せる場所なのは有り難かった。翌日は前日とはうってかわった大快晴で、親不知までは標高は下がるばかり、すなわち気温は真夏の下界なので上がるばかりである。し



崩壊した魚どめの滝

かもこの桐海新道は、わざわざ日本海親不知まで道をつなげたせいか、極めて無理のある道筋を通っている。全身汗みどろとなって日本海に到着した。泊までタクシーで戻り、車を回収。筑波へ戻った。今年は結局梅雨が明けないという異常事態の中では、うまく日程をこなせたのではないと思う。最後はすっきりしない終わり方だったが、今年も充実した山行が出来たと思う。多忙な日程の中、私のわがままに付き合ってくれた古山氏に心から感謝したい。

7/29

北又小屋(4:30)―二合目(5:30)―長瀬(6:00~7:00)
―恵振谷出合(9:00)―ビバーク地(17:00)

7/30

ビバーク地(10:20)―白金谷(11:40~12:00)―漏斗谷出合(12:15)―三段滝上(15:10)―ビバーク地(黒岩平15:30)

7/31

ビバーク地(黒岩平7:00)―二又(10:00)―1270m地点(12:00)―犬ヶ岳(15:20)―桐海山荘(15:40)

8/1

桐海山荘(5:00)―白鳥山(9:00~9:15)―親不知(13:50)

(中居 記)

大峰山塊 白川又川本流～火吹谷

1998. 8. 6～9

パーティ L 古山正文、本図一統

8月5日。午後7時になってこの計画が決まった。何と2時間後の9時には出発する予定なのだ。実はザクロ谷に行く予定で準備を進めていたのだが、北陸方面は天気が悪く、この時間になってやっと諦める結論を出したのである。でも4連休を取ってしまったので何処かの山には行きたい。現在天気の良いのは近畿以西のようだ。候補として上がったのは九州と紀伊半島の谷であった。本気で九州行きを考えたが、資料もなければ谷に詳しい知人もいない九州は、転戦するにはいくらなんでも遠すぎるということでボツ、紀伊半島にした。紀伊半島と言ってもいささか広ござんす。さてどこにしよう。知識も地図もないし、資料を探す時間もない。池郷川と白川又川の岩屋谷へは行ったことがあるのでその周辺の地図は持っている。よし、白川又川本流にしよう。地図箱をひっくりかえてみたが、残念ながら「弥山」の2万5千図がない。そこで手持ちの「釈迦ヶ岳」の範囲内での遡行することにした。ルートは本流下部から火吹谷に入り、大滝の落口に流入する枝沢を登って小谷川に降りる予定である。装備は今さら変える訳にもいかず、ザクロの装備をそのまま持っていくことにした。家を出る直前に「フォルナバー」から青島氏の記録を捜し出した。土浦のコンビニに着いてから道路地図帳を広げ、現地までのルート選定を始めるなんて、いったいこの山行はどうなることやら。関西の谷は関西の人に聞くのが一番とばかり池上さんに電話を入れる。池上さんは『え！今からこちらに来～はるんですか』と驚いておられた。池上さんの話によると、白川又川林道も小谷川林道も現在はかなり延びているとのこと、又、谷の情報も得られ大変助かった。流石日本の動脈東名高速は交通量が多く、運転ですごく疲れてしまいダウン、亀山付近のパー

キングエリアで仮眠を取ることにした。日が昇って来ると暑くて寝ていられず日陰に移動した。それでも暑くて寝るのを諦め再びハンドルを握ることにした。尾鷲の書店でハイキング地図を買おうとするも、店が開くまで1時間以上も待たねばならず、これも諦める。

6日(晴)。午後1時頃だったか、余計な装備を車に置き、十郎谷出合500m下流の枝沢から懸垂で入渓する。十郎谷出合からはゴルジュとなり、いよいよ泳ぎだ。水量は少なく泳ぎは楽だが、深夜の長時間運転で疲れているので、古山には悪いがザックピストンでザイルに引かれ、ラクチンラクチンの専門で行く。紀伊半島の谷は水量が多くてゴルジュの規模が大きく、私はとても好きだ。しかし、残念だがここは上流の取水口で水を抜かれてしまい、干からびた大蛇のようで衰えを感じる。ボタモチ滝にハーケンを打つ気にもなれず左岸を巻く。アブ(私はメジロだと思うのだが?)を追い払いながら河原を行くと、今日のビバーク予定地のコブキに着いた。早速竿を出してみるがアタリなし。やっと釣れたと思ったら何とハヤだった。取水口の所には大きなアマゴが何匹も悠々と泳いでおり、それを釣ろうと糸を垂らす、まったく相手にされず、頭に來たので石をぶつけてやった。それを見ていた古山に大笑いされる。

7日(晴一時夕立)。取水口の上は水量豊富で干からびた大蛇も生を取り戻したようだ。オングロコ谷出合から再びゴルジュ帯に突入。ここで原因は分からないがカメラに水が入ってしまい、今までのいくつかの山行記録写真がパーになってしまう。さらに今回の山行写真は一枚もないことになる。30m泳いで左岸スタンスに立つ。あと10m泳げばこの淵は突破できる。でもこの水勢を我々の水泳技術で突破するのは無理であろうことは見た

だけでわかる。右岸の巻き込みを利用してハーケン連打で前進しようとするもリスがなく、私が1回と古山が2回トライしただけで、さっさと尻尾を巻いて高巻くことにした。2ポイントの人工で登ると淵の上に降り立つことができた。その先のトロを泳ぎ、浅瀬で一息入れると次に現れたのは1m滝である。右岸リスから突破しようとハーケンを2本打つが、無理な姿勢をしていたためだろう左肘を痛めてしまった。予想以上の寒さに震えが止まらず、肘の痛みも加わって戦意喪失、古山に交代する。私は古山のビレーをしなければならないのは重々承知しているのだが、ビレーをするには腰まで水に浸かなければできない。あまりの寒さにインチキしてテラスに這い上がり、古山も早く諦めて戻って来ることを祈っていた。やがて古山が寒くてだめだと言いながら戻ってきたので、少し泳ぎ下ってから左岸の巻に入る。モンキークライムを始めると体も暖まり震えが止まってきた。こんなに寒いんだったら防寒対策をしてくるんだ。左肘の痛みが強く屈伸が思うようにできない。剥離骨折でも起こしてしまったようだ。でも痛いなどとは言っていないので我慢するほかあるまい。もう水には入りたくないぞ。と思いきやすぐ又飛び込みだ。右の岩陰からえらい勢いで水が落ちている。右の凹角をフリクションで登り、次の滝は左の垂壁をショルダーで越し、泳いだり登ったりでコグロコ谷出合を通過する。

ある時こんな光景を見た。アマゴの滝登りである。小さなアマゴだったが、落ちている水に逆らって本当に登るのである。しかし一度に1mと登れないので、水面から50cm位の高さにあるテラスで一息つけるのである。私の所から2mと離れていない。アマゴの奴、私を見ているではないか。俺を捕まえらるなら捕まえてみると言わんばかりだ。“こいつ”とばかり捕まえようとしたらビョンと跳ねて水の中に戻っていった。昨日のアマゴといい、このアマゴといい、よくよくバカにされてしまったものだ。また古山に大笑いされてしまう。

泳ぎと登り（直登と高巻の境はどこなの？どこまでが直登でどこからが高巻なのか知っている人がいたら教えて下さい）を繰り返すと河原になり、やがてフジトコにでた。吊り橋は現在使われていないようで葛の木に覆われていた。しばらく河原を行くと又ゴルジュになり、中ノ又谷出合を通過する。先ほどから様子がおかしかったお空が急に泣き出してきた。それも大泣きだ。と同時に今日のビバーク地である火吹谷出合に着いた。激しい雨の中フライを張り、古山はマキ取り、私はオカズ取りと仕事を分担する。今日の私の腕は冴え渡り、入れ食い状態である。どんなもんだい白川又のアマゴめ、思い知ったか（本当は腕で釣っているのではなく、場所で釣れているだけなのだが）。たちまち塩焼きと刺身と骨酒分を確保したので早々に宴会とあいなった。雨は降っているし、水をたっぷり含んだマキは燃えがイマイチだったが、

それにもめげず宴会をやり通す。風の通り道なのかちょっと寒いビバークであった。

8日（晴）。火吹谷に入る。ビバーク地を出発してから10数歩しか歩いていないのにもう泳がされてしまう。焚火でやっと乾かした衣類もこれで全身ズブヌレだ。連瀑帯であるが、直登できる滝は無く小さく巻いて行く。谷の規模、水量、ルートファインディング、いずれも奥秩父回りよりはグレードがかなり高いと見てよい。丹沢、奥多摩、奥秩父あたりを少しくらいやったからといって安易に入れる谷ではあるまい。やがて大滝に出た。岩壁に囲まれ60mを一気に落ちる素晴らしい滝で、感嘆の声をあげてしまった。あまりの素晴らしいさに滝下まで行ってみたら滝壺はなかった。左岸を高巻いて行くと我々の詰める予定の枝沢に出た。なんせこれ以上上流に行くと、「釈迦ヶ岳」からはみ出してしまう。我々の手元に「弥山」の地図はないし、この枝沢が「釈迦ヶ岳」の北限ギリギリのルートなのだ。

枝沢を少し登った所で小休止していると突然古山が、『本図さん蛇、へび』と叫んだ。何かかと思って振り向くと、蛇が私に向かってジャンプをしながら突進してくるのではない。蛇が嫌いではない私もこれにはドキッとした。咄嗟に立ち上がったが、それはなぜかすぐに分かった。蛇は蛙を追っていたのである。蛙がジャンプをすると蛇もジャンプをし、蛙が私の方に逃げてきたので、蛇もそれを追ってきたのだ。蛇は獲物を追っているときは他は何も見えないのかな。ホントに私の足元を通って行ったんだから。

やがて林道にでた。私の地図には載っていないので右左どちらに行っても良いのやわからない。古山が偵察に出るが分からず忠実に沢を詰めることにした。もう一本林道を横切り稜線にでた。あとは稜線を大榎山まで辿り小谷川に降りれば良いのだ。周りに見える山や尾根の名前はぜんぜん知らない。しかし聞くとところによると、白川又の奥には八経ヶ岳という100名山に入っている山があるそう。まあ私にはどうでも良いことだが。稜線を5分と歩かないうちに又林道にでてしまう。でもこれは今までとはちょっと違う。なぜならば、この林道については情報を持っていたからである。これが池上さんの話していた小谷川林道に違いない。

『これを行くべ、もし間違っていたら小谷川目指して直降すんべや』

と古山に声をかける。果たしてこの道は小谷川林道に間違いなかった。暑い炎天下、昨日の寒さを恋しく感じながら、長い長い林道歩きが始まるのでした。4時間近くも歩いたのだろうか、やっと国道169号線に出た。そこに「みーやん」という食堂があった。そこのおばさんにバスの時刻を聞くと暫くないとの返事。タクシーも20キロ離れた町から呼ばないとないとの事。歩いたらさらに4時間はかかるとの事（この時自分達の行く所は池原

だと思こんでいた)。ガッカリし、もうどうにでもなれとそこに座り込んでしまった。まもなくさっきのおばさんが軽トラで吹っ飛んで来て『今バスが通ったからすぐ乗って』と怒鳴っている。今道路にお店を広げたばかりなのに、急いで荷物をかき集めトラックの荷台に乗り込んだ。凄いスピードでバスに追いつき、クラクションを鳴らしてバスを止め、親切にもバスの運転手に『この人達を池原までお願いね』と言ってくれた。急いだのでたいしたお礼も述べずにバスに乗り込んでしまった。ぼんやりと景色を眺めていると古山が『ここだ』と叫んだ。

『本図さんここですよ』『ん？、あ、そうだ。ここだ。ここだ』『運転手さんここで降ろして下さい』『ここは白川橋ですよ、池原はもっと先ですよ』『いやここでいいんです』

この路線バスは自分の好きな所で乗れ、好きな所で降りることができるのだ。急いで乗ったもんだから1万円札しか用意していなかった。運転手さんもおつりがないという。すると乗客の皆さんがお金を出し合ってくれて、おつりを立て替えてくれたのだ。清算は終点に着いてからとようだった。久しぶりで人情を感じ、嬉しい一日であった(以前池郷に来た時、そこの地名が池原だったので私は覚え違いをしていたのだ。又、みーやん食堂のおばさんには、後日お礼の電話を入れておいた)。

古山が車の回収に向かい、私は道端に寝っ転がって古山が戻って来るのを待っていたが、蚊が多くてゆっくりしていられなかった。その姿は頭グシャグシャで不精髭、

まるでホームレスそのもので、決して地元でできる格好ではなかった。近くの酒屋でビールを仕入れ白川又川林道を登る。ビバーク適地と思われる所は、すでにキャンパーに占領されているので、かなり登った路肩に幕営地を求める。ここは水も取れ、薪も豊富で快適な場所であった。あまりにも盛大な焚火には熱くて近くに寄れなかった。恵まれた天気、楽しめた遡行、そして厚い人情と素晴らしい山行だった。いつもよりビールも進み、快い酔いと疲労感が全身を包んだ。

9日(晴)。白川又川林道を奥まで偵察し、池上さんで行ったことのある人之波温泉に行くも時間が早くて入れなかった。柿の葉ずしを買い帰路につく。途中私の大好物である「赤福」を買おうと、高速道路のサービスエリアとパーキングエリアの売店を探し回ったが類似品ばかりで「赤福」は買えなかった。

写真に加えコースタイム記録も紛失しました。
ごめんなさい。

(本図 記)

利根川本谷一沢の王道を行くー

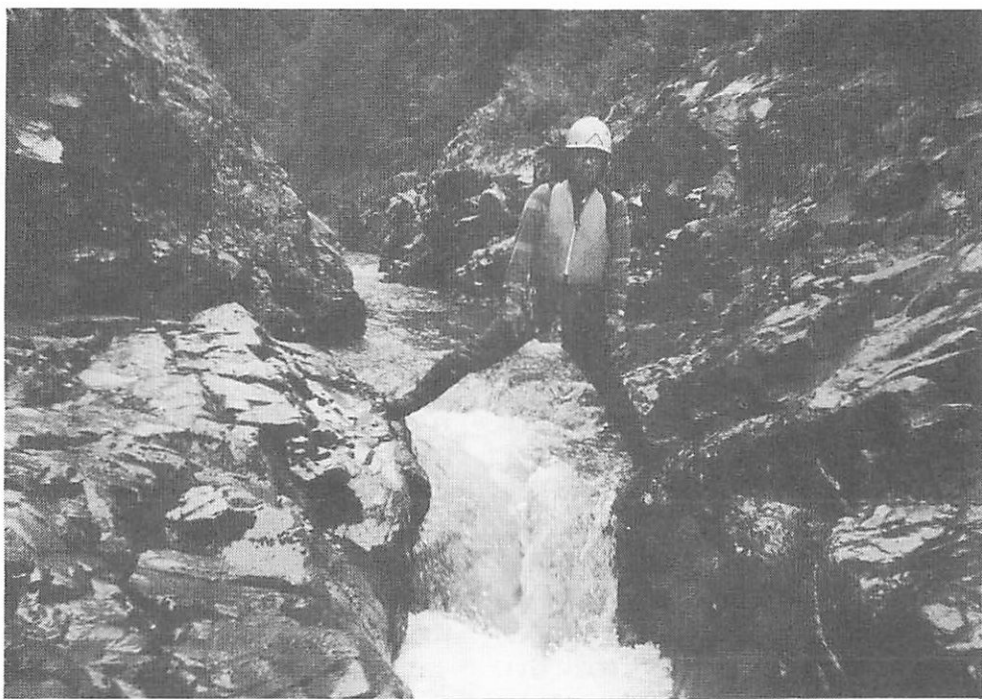
1998. 8. 11~15

パーティ L. 古山正文、笹平孝

今年の夏は天候不順で7月中頃の梅雨明けのはずがズルズルと延びて出発する日も停滞前線が本州上に横たわっている。利根川流域は初めてなので、天候状態の良いときに行きたいものだが、八木沢ダムからの渡船を手配してあるので、今となっては止めるわけには行かない。

11日。八木沢ダムまでの道は車高を低くした笹平君の車で楽に行けた。ダムには釣師の車が多数駐車していた。車外で寝たが、藪蚊と小雨に妨げられた。5時に渡船に乗った。時速40km/h位のスピードで快適に行く。徒歩ならば左岸に見える林道～藪漕ぎとなるはずだ。30分位で本谷右岸に着いた。船頭の人に登山計画書を渡し、下山後電話する事を約束し、別れた。少し行くと水長沢出合の河原に着き、そこで朝食、遡行の支度をした。水量は意外に少ないように感じた。第一の難所、シッケイガマワシは大きく開けた谷で、何回かのスクラム徒渉で越えた。左岸に巻き

道のある為衛門淵と巻き淵の二つの大きな淵があるハズらしいのだが、しっかりと確認できなかった。ただし右岸と左岸でロープを出したヶ所があった。越後沢出合で休んでいる内に雨が降り始めた。この先は第二の難所、剣ヶ倉出合の通過となるため、雨の強くなる前に急いで進む。が、剣ヶ倉沢出合に着いた時には水が濁り始め進みにくくなった。この先はゴルジュとなっているので、出合から右岸の巻き道に避難し、越後沢出合のテン場まで戻り雨宿りしようとした。途中で林を切り開いた場所があって、そこでシートを張って休んだ。雨は強くなるばかりで止む気配はなかった。沢は増水しゴルジュは濁流でうめつくされた。だいぶ早いここでビバークする事にした。午後になって、ようやく雨は止んだ。夕方になって少し水量は減ったが、濁りは消えていなかった。伐採跡に残っていた薪を集めて焚火を起こすことが出来た。笹平君の持ち上げた缶ビールで入山祝い。



剣ヶ倉出合のヒトマタギ

12日。今日は昨日遡行を打ち切った、剣ヶ倉出合から遡行開始。すぐにヒトマタギで、写真を撮る。一ヶ所左岸を木登りで小さく高巻きぎみに登った以外は問題なく通過した。出合を過ぎると雨が降ってきた。滝ヶ倉出合辺りで雨がきつくなってきた。この先は最難所のオイックイであるので、出合の脇でシートを被って様子を見る。川幅の広いところなのに、みるみるうちに水嵩が増した。ここに着いてから30cmは増水している。まだ2時間位しか行動していないので、チャンスがあれば先に進みたい。笹平君がすぐ上のビバーク地を確認してくれたので、そこに移動しシートを張って雨宿りした。お昼を過ぎても雨が止まず、沢床は完全に濁流におおわれてしまった。結局ビバークに決定。する事がないので、近くにある枯れ枝を集めシートの下で焚火をしたりして時間を過ごす。夕方によく雨が止んだ。

13日。朝起床前の4時に再び雨が強く降り出した。7時過ぎによりやく止んだが、昨日の遡行打ち切り時以上に水位があって、様子見。天気は晴れ間がのぞき、日の光が当たるようになった。12時半に出発の限度にして待機。順調に水位は減少し、昨日の水位よりも低くなり始めたので出発を決定。いよいよオイックイ遡行開始。右岸をへつって行こうとするが、ザックが浮袋となって進めない。オイックイの入口からちょうど右に曲がった辺りまでの3P空身とザックピストンで行く。そこからは腰ぐらいの水位だが水流のためへつって行けなくなり、右岸を所々小さく高巻く。オイックイはゴルジュ状で次の左に曲がる辺りで徒渉して

左岸に移り左岸をへつって行く。オイックイには全く雪がなかった。この徒渉点まではオイックイの中には滝がないので流されても大丈夫そうだが、入口まで止まらないだろう。中越後沢に少しだけ雪のブロックが残っていた。裏越後沢出合にあるというビバーク地は見あたらず、本流の流れの変化のため消失しているのではないかと。ここからはビバーク地を探しながら進む。左からはいる西俣沢のすぐしたの左岸のちょっとした台地にビバークすることにした。草の倒れ方から昨日、今朝の雨では増水に耐えられると思われた。一応脱出用のロープをセットした。西俣沢出合の所にちょうど釜があるので竿を出したら笹平君が大物を一尾釣り上げた。私は釣れないので止めにし、焚火の準備に専念。笹平君は気を良くして、薄ぐらくなり始めた中、更に上流へと向かって行った。大物一尾釣って戻ってきた。結局2尾であったが、刺身をするには十分であった。アライは味噌汁にいられて、余すところ無くいただいた。

14日。5時半に出発。朝一番から、腰まで浸かって釜越え、すぐに魚止めの滝。右岸の岩稜を登る。丹後コボラの滝は左壁をガイドブックの写真のように確保して登る。大利根滝は右壁を登り、ハト平に着いた。結構快適そうなビバーク地の様に見えた。この辺りから、ようやく傾斜がきつくなり始め、高度を稼ぐようになった。人參滝は右の稜から高巻いた。深沢滝、赤い岩からなる赤沢滝、水上滝と大きな滝を登ると、ようやく源流という感じになってきた。水量の多い方へと登って行き、三角雪田となるだろう草斜面の中を

進んで、最後に筐の中をほんのすこし歩いて、登山道に出て遡行終了10時半。水源の石碑と大水上山のちょうど中間ぐらいか。大水上山まで記念にピストンし、丹後山まで稜線歩きを楽しむ。西尾根の下りはジグザグの登山道ではなくまっすぐと下りているので下りにくい。十字峠をすぎ、ちょうど三国ダムのダム湖周回道路のトンネルの所で夕立に降られたが、トンネルを出たところで止んだ。野中バス停まで左岸の道路を下った。最終バスで小出の駅に着いたときには既に上越線の水上まで行く電車がなかった。時刻表で調べた結果湯沢から新幹線で上毛高原に行けることが判った。湯沢まで電車で移動、新幹線の時間待ちの間駅前でちょうど開催中の湯沢祭りの夜店をのぞいたり、花火を見たりした。二階建ての新幹線を1駅だけ乗り、上毛高原からタクシー(～¥12000)で八木沢ダムに戻ったと

きは22時過ぎだった。

11日

八木沢ダム(5:00)(渡船)ー水長沢出合(5:30~6:00)
ー剣ヶ倉沢出合ビバーク地(11:00)

12日

ビバーク地(7:00)ー滝ヶ倉沢出合ビバーク地(10:00)

13日

ビバーク地(12:30)ー西俣沢下ビバーク地(17:00)

14日

ビバーク地(5:30)ー稜線(10:30)ー丹後山(12:00)ー野
中バス停(16:30)

(古山 記)



オイックイ左岸をへつる

秩父・滝川本流

1998. 8. 23

パーティ L 本図一統、高木博行、遠藤和彦

私は弊社相模原工場の方に長期出張していたため、じつに数ヶ月ぶりの山行となった。すっかり夏も最盛期、本図さんから泳ぎの沢に誘われた。秩父の滝川だそうである。しかし土曜に都内で用事があり、夜に秩父からの合流となった。23時頃西武秩父で待ちあわせ、ほどなくしてデリカがやってきた。市内を過ぎ、しばらく川又の細い旧道を走ると、突然広い道にぶち当たる。最近で来た雁坂トンネルの車道である。この道は、学生時代に豆焼沢遡行に来た時はまだ工事中であった。そのときは出きかけの暗いトンネルの中を歩いたりしたが、10年経つうちにすっかり立派な道路になっていた。普通は10年経とうが20年経とうが景観は全く変わらないものだが、付近の様相を簡単に一変させてしまう。土木工事とは恐ろしいものだ。将来は秩父市内まで広い道が伸びるようで、現在工事しているようだ。

途中の天狗岩トンネルの横で仮眠し、6時頃に出発。天気はどんより曇っている。今年の夏は天候不順で、こんな週末が多い。

最初は、滝川に向かって100m程度の崖を、木を伝いながら降りる。うっすらと踏み跡がある。わたしは数ヶ月のブランクのためにすっかり足腰が弱ってしまい、急勾配の崖にやっとの思いで本流に到達した。

しかし、我々が降りた所はどうも豆焼の方で、しばらく豆焼を遡行してしまった。途中でどうも水量が少ないということで引き返すと、本谷との合流点に到着した。さすがに本谷の水量は多い。しばらく河原伝いに歩く。久しぶりの山のためか、足元がふらつき、石にすねをぶつけてばかりいる。それにフェルト底がどこまで持ちこたえるかといった感触も、すっかり鈍ってしまった。しばらくすると深い淵が次々と現れるようになり、泳ぎが始まった。巻いてばかりいてはつまらない沢も、泳ぎを取り入れるとなかなか面白くなるということが分かった。しかし最初は面白がっていたが、さすがに冷たい。何度も連続するとだんだん水に入るのがおっくうになる。本図さんはウェットスーツで完全防備していた。特にザイルは使用しなかったが、一ヶ所流れが急な所で、どうしても流されてしまい本図さんに助けてもらった。泳ぎを十分堪能した後、程なくつり橋小屋に到着した。小屋といってもすっかり荒れ果てていた。ここから仕事道が川又に伸びている。ここからさらに1時間遡行することになった。上部は狭い廊下になっており、それなりに面白い。ブドー沢出合い近辺まで遡行し引き返した。帰路では、右岸の崖についている巻き道を、木を伝いながら1m程降りるところがあり、えらく怖かった再びつり橋小屋に戻



滝川本流…ガンバレ！遠藤

る。ここから仕事道を使って国道に戻る。しかしこの仕事道が長い長い。最初は左岸の斜面を登り返し、尾根を乗り越す。しばらくすると右への分岐があるが、そのまま直進し北斜面を延々トラバースする。道も歩きにくく、しかも溪流シューズでの歩行のため足が痛い。それに久しぶりの山行でひどい筋肉痛である。この道をいやというほど歩き、ようやく国道近くの林道に到着した。しかしそこから天狗岩トンネルまでの車道も長かった。久しぶりの山行はキツかった。帰路は、長瀬付近が多少渋滞した以外は順調であった。

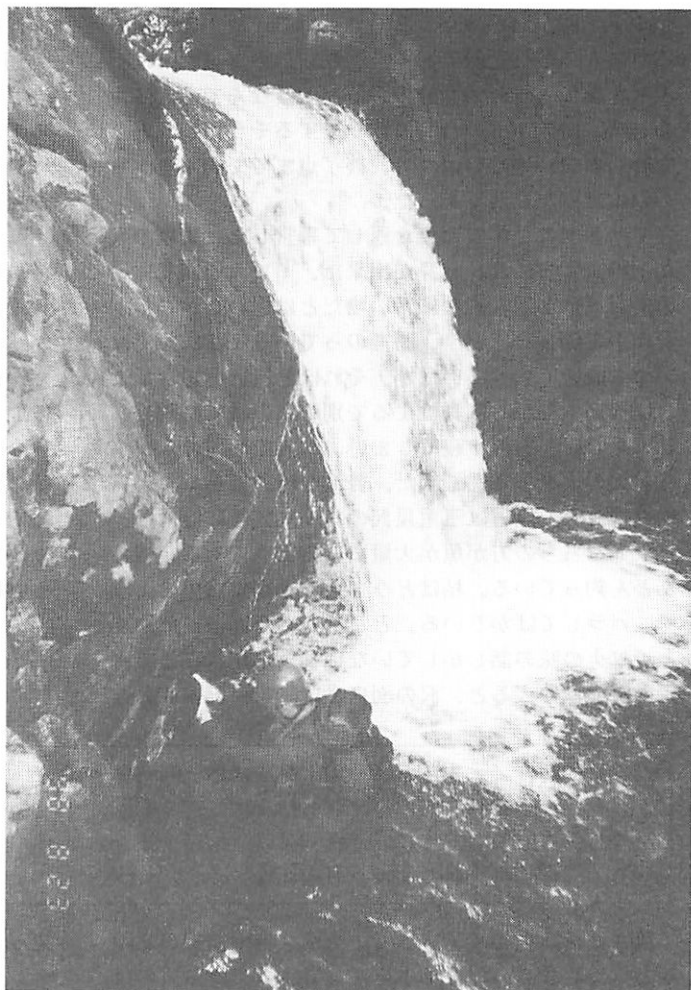
8/22

つくば—西部秩父—川又—国道の天狗岩トンネル前（泊）

8/23

天狗岩トンネル（0.5）—本流（4.0）—つり橋小屋（1.0）—ブドー沢出合付近（1.0）—つり橋小屋（3.0）—天狗岩トンネル

（遠藤 記）



滝川本流を登る

坪川流域 三重泉沢

1998. 9. 12~13

パーティ L 仲川敏幸、名雪博二、木村一、遠藤和彦

9/11. 今回は、釣りがメインの沢登りだそう。東京のメンバーに会うのも今回が初めてである。川越で東京のメンバーと待ち合わせ、沼田から坪川に向かう。デリカで坪川沿いの林道を延々と進む。

先週の集中豪雨で大きな落石が道に落ちている。しかし、先行車がありすべて除かれていた。それでも乗用車ではキツそう。途中ゲートが1箇所あった。通行手形でゲート開けるのを初めて見た。これは凄道具である。山行後に早速自分も、ジョイフル本田で材料を買ってきて通行手形を作成した。足尾銅山の関係者が住んでいたという平滝の集落跡まで車で入り仮眠する。車になんと網戸まであり、快適だった。

9/12. しばらく林道を歩く。林道は大幅に崩落しており、これより先の車の通行は不可能である。林道を30分ほど歩き、途中で通行方向左手の沢に入り、

直ぐ右手の斜面にある巻道を使い、尾根を乗り越す。この巻道は、踏み跡もしっかりしていた。尾根を一つ乗り越せば三重泉沢の広河原に到着する。今回はバスしたが、ここより下部側にある三重泉沢核心部の遡行も面白そう。ここ広河原から竿を出し釣りを始めた。木村さんから毛針を分けてもらい、テンカラをはじめてやった。毛針は手作りだそうで驚いた。なかなか合理的で、釣りながら沢を遡行するのにとても適した釣り方だと思う。今回は三重泉沢の右岸から合流するアザミ沢を釣り上げる予定である。広河原からアザミ沢の合流までは直ぐであった。しかし、釣果は思わしく無い。延々と釣り上がるが、当りさえない。しばらく遡行し、当りがあった。どうもテンカラでは餌釣りよりも当りを遅らせる必要があるようだ。その為最初に一匹はバラしてしまった。その後またしばらくしてよ

うやく一匹かかった。30cm程のイワナで、私のこれまでの最長記録であろう。私以外のメンバーは、みな年季の入った釣り師のようだが（なんでも沢さえあれば、山スキーの合間に釣りをするそうだ）、どうも肝心の魚がいないようで、終了点までで釣り上がったのはたった2匹であった。

アザミ沢の途中まで引き返して幕営した。東京の人が手際よくさばき、刺身が出来た。イワナの刺身は始めてたべたが、こんなに旨い物だとは思わなかった。身が引き締まっておリ、脂ものっている。これまではいつも焼いて食べていたが、それほど旨いと思ったことはない。しかし刺身はまるで別の魚の様で格別である。その後、皆直ぐ寝てしまい、一人で酒をのみながら焚火の火を見て過ごした。贅沢な時間である。

9/13。翌日は三重泉沢の本流に釣りに行った。どうもこちらの方が魚が大量にいるようである。皆ほとんど釣っている。私はどうも合わせがまだ早いようで、バラしてばかりいる。ところで、今回はまだ釣りとイワナの味の話しかしていないようだが、ここで本題の沢の話の入ると、沢の面白さは三重泉沢本流の方

が圧倒的に上である。大きな滝が連続し、こちらの沢は遡行だけでも面白いと思った。中流の核心部と組み合わせたら、遡行がメインでも充実した沢登りが出来るであろう。

釣りを数時間で切り上げ往路を戻った。車を停めてある平滝の少し下流側には、旨い湧水が出ていて、皆ポリタンクに汲んだりして余念が無かった。この平川流域は、なかなか自然が濃く面白い山域だと思った。入山者が少ないのであろう。しかし下流の川原では、バーベキューでもやっているのか多くの車が入っていた。通行手形を要する例のゲートが、一般人を閉ざしているのであろうか。

今回の沢は、遡行という面では少々物足りないが、そのかわりテンカラを教えて貰い、釣りをおおいに満喫できたのが収穫だった。木村さん曰く、釣りとキノコが分かれば一生ものだそうだ。30に突入してしまった私としても、今後ぜひいろいろ教えてもらいたい。

(遠藤 記)

称名川雑穀谷ザクロ谷一沢の裏道を行く

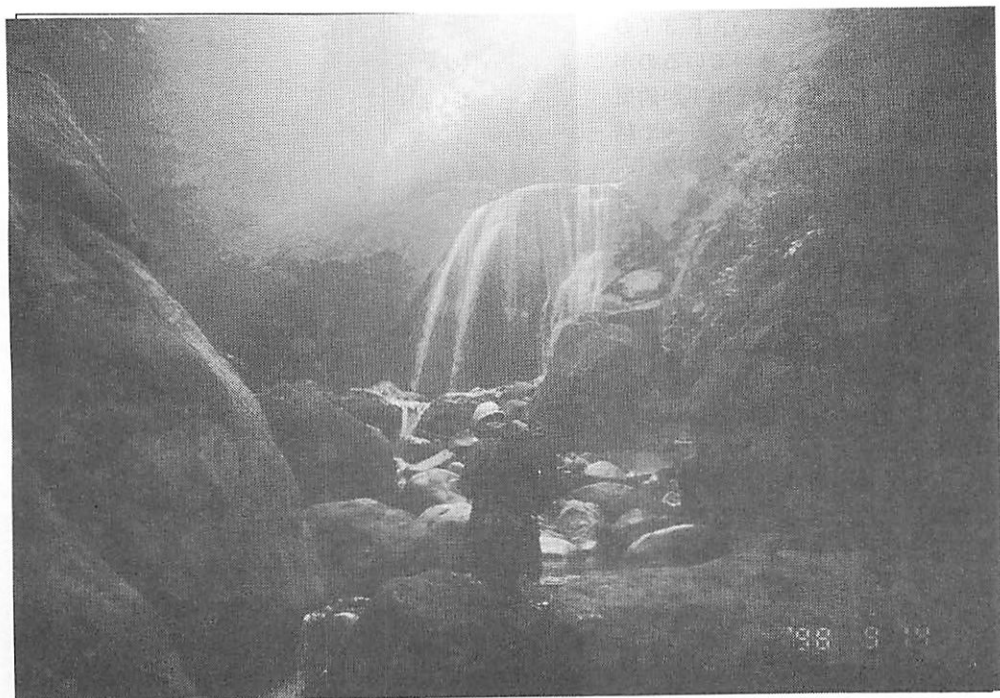
1998. 9. 12~14.

パーティ L 本図一統、古山正文

最初8月の上旬に予定していたが、梅雨前線が北陸地方に停滞していたので中止にして、奈良と三重の県境辺りの白川又に変更した。9月のこの連休、“天気”は“まあまあ”そうなので、遡行を目指した。しかしこの天気こそが遡行の一番の核心なのだ。何しろ名高いゴルジュの険谷なので、途中の安全地帯に達していない場合大変なことになる可能性が非常に高い。その安全地帯もそこそこにあるわけではない、中間部の大日岳登山道牛首峠下付近だけらしい。またゴルジュは特に出合からのF1~F5までが非常に難しいらしい。

12日。朝7時のゲートが開くまで寝過ごしたので、結局車で称名川第二発電所まで入った。導水管の横の階段を登り、狭いトンネルをくぐって雑穀谷に下りた。雑穀谷もザクロ谷も上に大日平の湿地帯があるので、その栄養分が流れ込むせいか岩の表面は藻がはえていてヌルヌルとして滑り易い。先行していた一人の釣師に声を掛けて先行する。この谷を詰めるとザクロ谷の出合となった。天気は晴れの予報だが尾根上は雲が湧いてきて、これから「遡行開始」と言うときにこれでは気が滅入る。気を取り直し、F1の釜を泳ぎ出す。水の冷たさに途中で戻り、雨具を着込んだ。そして再度挑戦。滝壺の3m位手前の右壁に指が掛かり、そこで流れに対して体勢を整え、壁を蹴って滝壺めがけて

突っ込む。滝に打たれて滝裏に抜け立つ事が出来た。そこから滝に打たれながら左壁の残置シュリングを掴んで強引に乗り越えた。この次のF2、F3はつながつていてF2を越え、ステミングでチョックストンのF3下まで行きその体勢で右壁にボルト一本を打ち、あぶみに乗り更にハーケン一本を打ち足してスラブに上がりフリーで滝上。ビレー中に不用意に足元に置いておいたジャンピング、スカイフック、マンチャク、シュリングを小砂利とともに流されてしまった。幸いジャンピング、スカイフックは各自が持つてくることになっていた、まだまだもう1セットあるので大丈夫。F4はF1と同じく釜を20m位泳いでから滝に突っ込む。一回目古山が左岸沿いを泳いで行くが流れが早く追いつけなかった。次に本図さんがやや左から泳いで行くが滝に突っ込むことは出来なかった。腰に付けた登攀具をはずして水の抵抗を減らして行くが、追いつけられない。それではと左岸をホールドを探しながら行くが、手がかり無し。寒さのため引き返す。どうしようかと思案していると、左岸の水線から3m位の所にボルトが何本か残っているのが見えた。それをつたって行き滝近くで振りトラバースぎみにロープを振って滝壺近くに飛び込み泳ぐ他ないだろうと本図さんが言い出した。ただし初めのボルトまでどうやって辿り



雑穀谷…てまり滝

着くかが問題だった。そこで出たのが釣竿のチョンボ棒だった。竿の先端何本かは使わず、残りをのばし先に輪ゴムであぶみ2台直列につないだ物を固定し、ボルトのリングにこの竿であぶみを引っ掛けようとするものだった。胸まで流れに浸かる本図さんを後ろから支えながら、しなる竿をうまく使って引っ掛けることが出来た。こうなれば泳いであぶみに取り付いて、トラバース気味のボルトに沿って滝へ近づいて行く。すると、下で見ていたよりも更にその先にハーケン、ボルトがしっかりと残っているのが判り、そのまま初登ルートをあぶみで行き、滝上へあぶみで降りた。F5はF3と同じ様なチョックストーン滝で左右分かれた水流の右側、右壁をボルト5本打って、あぶみで越えた。この岩は脆くボルト一本打つのに5分位で済み、楽だがその分効いていない。打ち込み作業中、本図さんのスカイフックとヌンチャクを落としてしまった。何とか核心を越えたのでビバーク地を探しながら、次々に出現する滝をショルダー、フレンズ、泳ぎなどありとあらゆる方法を使って、乗り越して行った。例の牛首峠近くになるとゴルジュが緩み、通常の険谷になる部分が現れだし、左岸の小さな台地にビバークすることにした。但し我々がどこにいるのか正確には判断付いていなかった。焚火用の薪は豊富だった。

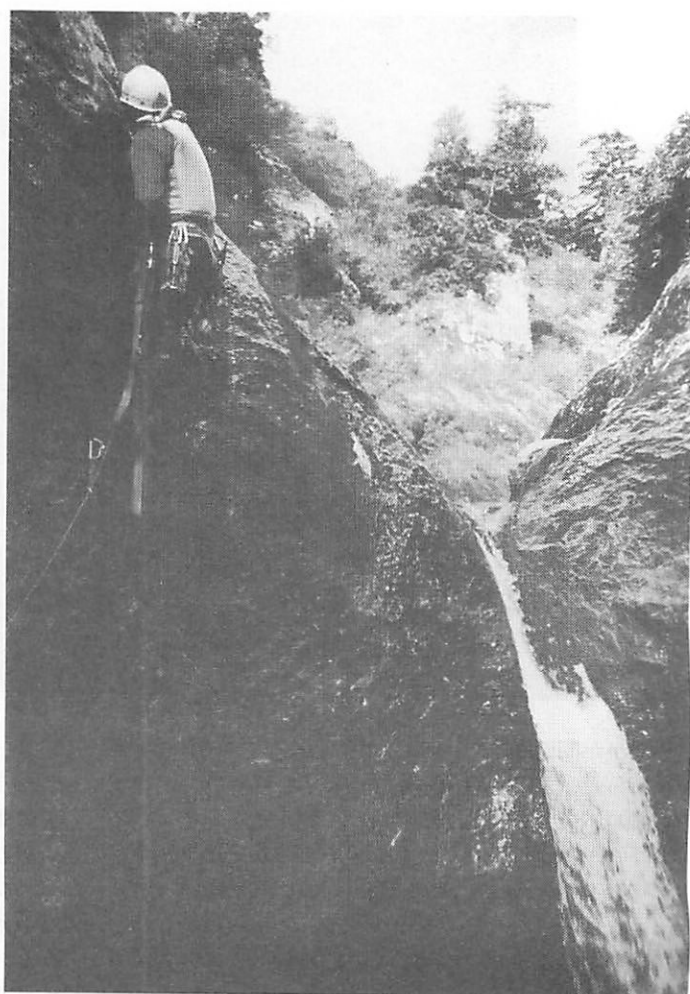
13日。昨夜は沢身より高いところにあるにも関わらず割と寒かった。いつもの事だが、本図さんがさきに起きていて火を既に起こしていた。出発直後滑ってしまい右手を少し痛めてしまった、が何とかなった。角状のチョックストーン滝に出会ってようやく現在地

が判った。きれいなてまり滝はまりも滝と言った方が色が良くあっている。これは大きく左から高巻いた。沢に降りたところは早乙女沢の出合の所であった。この辺りはボットホールが多く見られた。ここから再びゴルジュ帯となる。数個の滝を越えた後、水の出口のない釜が出現。泳ぎながら釜の縁に手をのばすがとどかない。予備の爪の小さいクリフハンガーを打ちつけてあぶみでようやく越えた。ゴルジュの中の多数の滝を越えて、沢の最狭部いわゆるひとまたぎを大股開きで越え、F25スラブ滝につき当たる。これは右岸の稜を出だしにハーケン、ボルトを一本つつ打ち足して、あぶみを交えて、1Pでブッシュ帯に入り、さらに1P登り、そこから1Pトラバースして、1Pで沢に降りた。すぐにソーメンが流れているようなソーメン滝を出だしにハーケン1本打ち足して越える。その上の滝は右フェースを本図さんがフリーで越えた。F34は釜の中のスタンスに立ち、左のフェースを残置のラインに沿ってあぶみで越える。何本かハーケン、ボルトを打ち足した。このF34で早乙女沢からのゴルジュ帯が終わり、流れも緩くなった。この辺りからゴミが目につくようになった。遡行者がそんなに多いと思えないので、疑問だった。今日の核心を越え、くたくたに疲れたので適当な左岸の土砂の堆積地でビバークした。焚火は2m位の炎が上がるぐらい盛大に行なった。

14日。昨夜は一昨日と比べ暖かい上、砂地だったので快適だった。出発してすぐ左岸にゴミの多数散乱している沢を発見。これが下流のゴミの原因で、この

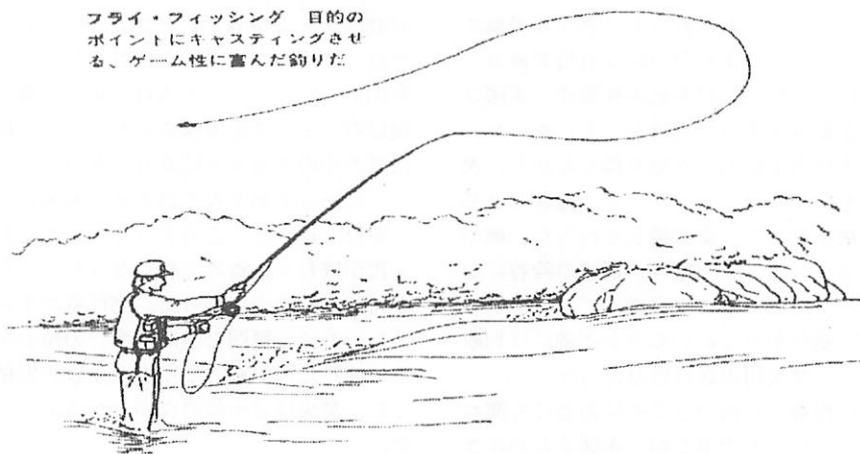
沢は大日平山荘の方へ続くらしい。F37の釜で大イワナ2匹が岸近くで泳いでいるのが見えた。本図さんがすかさず竿を出す釣果無し。F37は水流右のボロ壁をフリーで越える。巨岩帯の大岩を越えて、左右の壁が赤土色になった二股を右に入って、2、3個の滝を越えると、釜を持つ5m位の滝に阻まれる。釜に沿って水流右まで行って、ジャンピングを打つと、数回で穴が開くくらいの土壁。そうこうしている間に雨が降り出した。結局釜左の稜を2P登り、ブッシュ帯を1Pトラバース、懸垂1Pで滝上に降りた。50m程で本流を分かれ右のコンクリート状ナメ床の沢を行くと、程なく登山道に出て遡行終了。木道の上で登攀具を片づけて、雷雨の中を下山する。大日平は草原の中の木道歩きなので、雷が落ちるのはと心配した。牛首峠では、昨日登ってきた沢がほんの少しだけ見えた、かなり増水しているようだ。車道に出て荷物をデポして称名の滝を見学に行った。増水しているので特に激しい滝となっていた。称名川沿いの左岸の壁にもいたるところで滝が出現していた。車に戻る頃には雨が止み晴れ間がのそくようになった。

(古山 記)



ザクロ谷・F34を登る

フライ・フィッシング 目的の
ポイントにキャストイングさせ
る、ゲーム性に富んだ釣りだ



廻行図

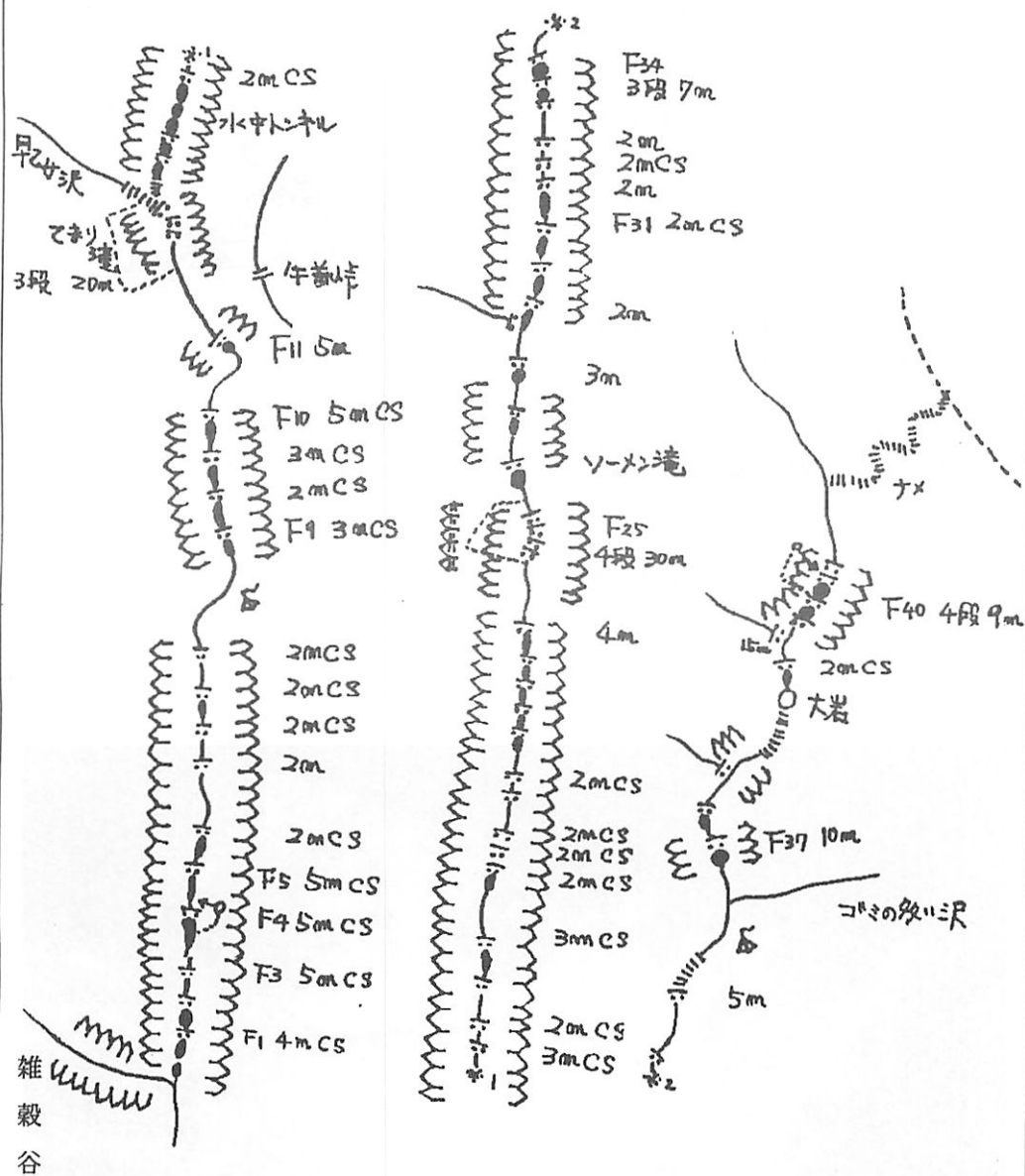
ザクロ谷

年月日

1998. 9. 12 ~ 14

作図

本図一統



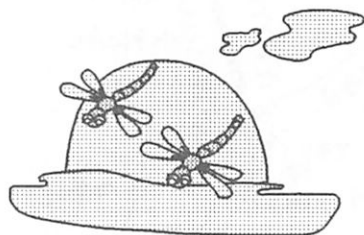
幽ノ沢・滝沢大滝

1998. 9. 20

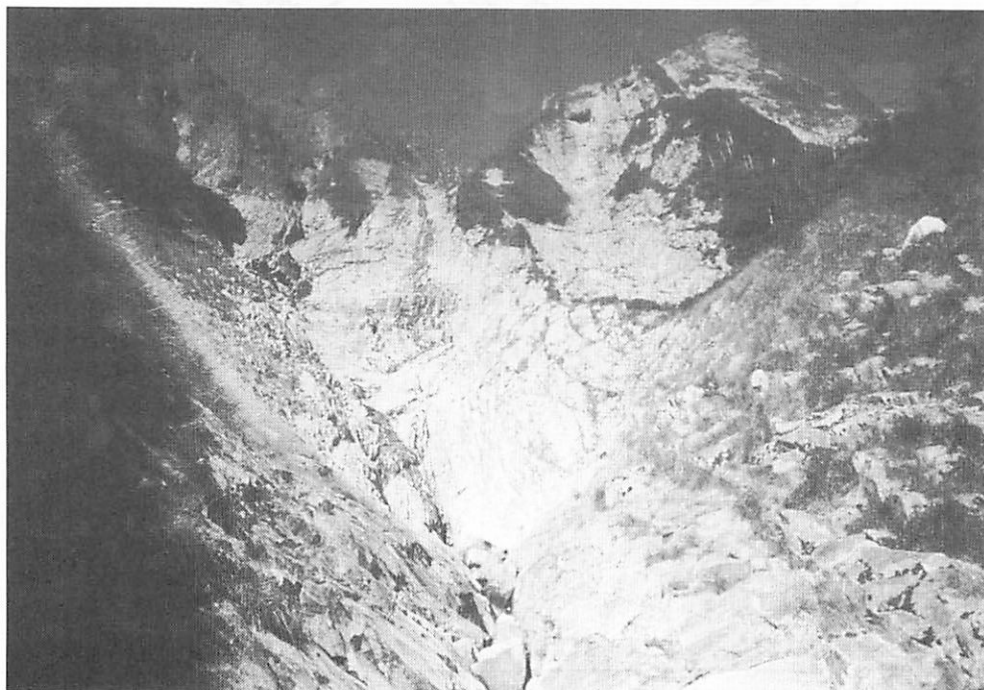
パーティ L 古山正文、笹平孝

この前の大雨で谷川岳の土合駅付近の道路は土砂が流れ込んでいた。駐車場で仮眠して朝起きてみると、一ノ倉沢の出合の川幅が広がっていたのでびっくりした。

幽ノ沢出合の所からは、全体がよく見えて大滝もよく見えた。水量がかなり少なかったので迫力の無い滝だった。沢を登っていくと二俣の所で他のパーティが休んでいた。左俣の方はすぐに滝になっているので適当な所でロープを出した。全体的にやさしいルートなので途中の支点は殆どが無かった。いつもハーケンを見つけないで登っていたので今回は少し登りにくかった。最終ビッチの所で流水から離れて左の方へ登ってしまったので、右寄りに登って滝の上に出た。それからロープを外して沢の左岸側を登って行った。右側の一本目のルンゼを登っていくと中央壁の頭の出た。そこから尾根沿いに行くと堅炭尾根に出て、幽ノ沢出合から一ノ倉沢出合へ下りた。



(笹平 記)



幽ノ沢・左俣大滝

はじめちゃんの思い出日記 (Part 6)

《黒部大タテガビン南東壁中央ルンゼ》

今年2度目の黒部渓谷だ。夏合宿で後立山の縦走後、黒部の溪に降りたが縦走路の人の多さにうんざりした後だけに黒部の良さがしみじみと感じられた。目的地の樺平には下れなかったが、黒部の岩小屋で過ごした一夜は忘れられない思い出となった。降りしきる雨の中、一晩中焚火をして岩小屋の中で語り明かしたあの夜の事が……。
この小屋に泊まるのはこれで2度目だ。

5年前の夏、黒部別山谷のスラブを登りに行き敗退した時だが、あの頃からいい加減な山行をしていたみたいだ。あの時のメンバーは愉快的仲間だったが、今回のパートナーの江平、富所もユニークで愉快な仲間だ。富所は先週自宅の2階から落ちてケガをし唐沢岳幕岩への計画を棒に振ったばかりだし、江平は自分のアパートに泥棒が入ったが本人は全然気付かず、泥棒が逮捕され警察からの通報で気が付いたが、泥棒は取る物も無く呆れて帰ったので被害は全然なかったというエピソードの持ち主である。2人とも若さと馬鹿さに満ちあふれたクライマーだ。我々貧乏クライマーにとって黒部は遠くて近い山である(意味深……)。

第4ダムから約1時間半で南東壁沢の出合に着いたが、南東壁沢出合は貧弱でうっかりしていると見落としてしまうかも知れない。沢に入ってしばらく登るとチムニー滝がでてくるが、ここは左のクラックから更にブッシュの繁った細いルンゼを登り、上部のスラブに出ることが出来た。ここから見上げる大タテガビン正面壁は腕そうな垂壁と大オーバーハングと幾つかの洞窟を有し威圧感を感じる。中央ルンゼの取付きは正面壁の基部を左にトラバースしてスラブ状ルンゼとの中間リッジから取り付く。1Pは灌木混じりの垂壁20m。更にブッシュ帯30mでバルコニーに出る事が出来た。ここからは中央ルンゼ本流に降り直登するのだが、先行パーティの落石が激しい為左壁を登る。40m。更に1Pザイルを伸ばすと傾斜が緩やかになり同時登攀に切り替えて登る。続くゴルジュ帯は直登するが上部からの落石が恐ろしい。ゴルジュ帯の上部はガレ場のルンゼで1歩踏み出す毎に落石が発生し落下していく。二俣の直下でスタカット登攀に切替えて、滝状の左壁を登るが脆くボロボロで神経をすり減らす登攀だ。2Pの登攀で二俣に着き上部をみると先行パーティは登攀を終了した様子なので、これからは落石の心配もなく思い切った登攀ができる事だろう。この中央ルンゼは先行パーティがある場合には常に落石の危険に晒される。特に二俣から上部では安全地帯は無く、二俣の下で待つ以外に安全策は無い。二俣から見上げる左俣はボロボロのルンゼでまさに岩の墓場といった感じがする。右俣は入り口は狭いが上部は開けて明るいルンゼである。右俣最初の滝はホールドが細かく意外と悪く感じる。更に2Pの登攀で洞窟の下に出るが、上部のルートが判然としない。左上には悪相のチムニーが見えているが……。意を決して左上から洞窟の上に回り込むが、朝から降り出しそうだった空からとうとう雨粒が落ちてきた。ルンゼの登攀で雨は大敵だが本降りになるまでにはまだ時間がある。ここから正面の傾斜の強いフェースに取り付くが、直登は濃しくトラバース気味に右へ右へと追いやられてここでハーケンを打ち、ビナクルを抱くようにして更に右上するが、ホールドにする岩、スタンスにする岩が全て浮いておりその浮石をだましながら登るが、落石がひっきりなしに今まで登ってきたルンゼに落下して行く。幸いにも右上気味に登ってきたのでパートナーへの直撃は避けられるが最悪の登攀だ。1枚岩のテラスに全員が集結出来たのが16時。黒4ダムからも視認できる左上バンドの登攀を2ピッチ、更に上部のスラブを登り、第3尾根の稜線に飛び出し登攀終了。17時半。ここでザイルを巻き、ヘッドランプの灯りを頼りに南尾根に向かって登り、P5下の岩壁基部に3人が座れる場所があったので、ツェルトを被り雨具を着て乏しい行動食を口に放り込みビバーク。夜半から雨足が強くなりビショ濡れのビバーク。翌日は秋晴れの快晴。P5ルンゼを下降路にとり、6回の懸垂下降とブッシュにぶら下がりがながらの下降で内蔵ノ助谷に降り立った。正面には昨年の秋に登った丸山東壁が秋空に聳え立っており、内蔵ノ助谷の岩の上に寝そべて次の登攀計画について話が尽きなかった。

1978年9月23日～24日

(木村一・江平尚志・富所正利)

《友好山岳団体の月報、会報、その他》

ありがとうございました

月報

◎Rohman NO.159, 1998. 7 B5 28P 浦和浪漫山岳会

奥利根・八木沢東(西?)・メーグリ沢右俣、南会津・白戸川、奥秩父・大洞川市ノ沢、奥利根・白ビ沢
右俣左沢～刃物ヶ崎山～ジロウジ沢四ノ沢～八木沢、東北森吉山・赤水沢、奥只見・羽根川支流～黒又
川高倉沢右俣支流～高倉沢左俣～ハマコ沢右俣～ハマコ左俣～右俣左沢～羽根川本谷下降ほか

◎Rohman NO.160, 1998. 8 B5 98P 浦和浪漫山岳会

夏山合宿特集・南会津白戸川流域・達波沢右俣～赤柴沢左俣、白戸川上五沢～下五沢、赤安沢、島太郎
沢、宿の沢、岩茸沢、藤倉沢、横松沢、上越・白毛門沢、越後巻機・金山沢、川内・割岩山、春の集中
・守門岳・破間川本流、オカバミ沢右岸登山道、本高地沢、守門川湯ノ又沢、鉄砲尾根ほか

◎Rohman NO.161, 1998. 9 B5 56P 浦和浪漫山岳会

南会津・三ツ岩周辺遡行、毛猛・末沢川足沢左俣～檜沢中ノ沢左俣右岸尾根～黒又川檜沢滝ノ沢～黒又
川黒石沢～第2ダム～黒又川上ノ大沢西ノ沢～中子沢集落、南会津・恋ノ岐川、南ア・策方岳、和賀・
マダノ沢～朝日岳～部名垂沢、南会津・馬坂沢サル沢、川内・八匹沢、大底川赤花沢ム沢、南会津・
小戸沢西ノ沢、北ア・仙人池、モンゴル紀行ほか

◎わらじ NO.508 1998. 7 B5 24P わらじの仲間

春の集中・室谷川小久蔵沢～日尊の倉山～貉ヶ森山、只見川滝沢川狩場小屋沢、滝沢川右俣左沢、霧来
沢本流、霧来沢もうがけ沢、蒲生川～雲河曾山、只見川塩沢川ほか

◎わらじ NO.509 1998. 8 B5 20P わらじの仲間

三国川下津川本谷～銅倉沢本谷ほか

◎わらじ NO.510 1998. 9 B5 26P わらじの仲間

飯豊・伊蔵沢～赤倉岐沢、飯豊川洗濯沢清十郎沢、頼母木川上ノ小俣沢、胎内川坂上坂上大黒沢、玉川
大又沢御秘所沢、松山沢、赤岳沢、大石川西俣川、越後・桑の木沢～ヨウガ沢、チベット・ニンチンカ
ンサほか

◎逍遙 NO.86 1998. 7 B5 16P 逍遙溪稜会奥

多摩・大丹波川真名井沢、泉水谷小室川谷、滝川水晶谷、南会津・阿賀野川只見川伊南川檜枝岐川船俣
川黒沢火打沢、武尊・片品川塗川西俣沢ほか

◎逍遙 NO.87 1998. 8 B5 20P 逍遙溪稜会

神室・大横川小荒沢、白川大又沢根ノ先沢、西又沢釜ノ沢、二口・穴堂沢～大行沢カケス沢右俣、徒渉
訓練・多摩川ほか

◎逍遙 NO.88 1998. 9 B5 20P 逍遙溪稜会

朝日・荒川東俣右沢、三面川末沢川、根子川赤倉沢ほか

◎Next! No.31 1998. 7 B5 32P 山岳溪流釣り集団むげん

奥秩父・大洞川、荒沢谷～桂谷、桂谷～荒沢谷、惣小屋沢、惣小屋沢右俣ほか

◎Next! No.32 1998. 8 B5 12P 山岳溪流釣り集団むげん

イオウ沢ほか

◎Next! No.33 1998. 9 B5 20P 山岳溪流釣り集団むげん

清津川棒沢ほか

◎とまのかぜ No.68 1998. 7 B5 42P 童人とまの風

五頭・三階滝沢オオベ沢小倉沢朴木沢、大荒川東小倉沢、大荒川本流～大日清水沢～東小倉沢左俣～西
小倉沢、折居川セイジョ沢タヌイ沢ム沢、広手沢～金山沢～三沢、三ツ峠、帝釈・馬坂沢フキジ沢、サ
ル沢、丹沢・ヒゴノ沢～戸沢、谷川・宝川板幽沢～裏布引沢～ナルミズ沢、南ア・篠井山鯨野川、奥秩
父・小常木谷、鳥海山、イエローカードが多いぞほか

◎とまのかぜ No.69 1998. 8 B5 24P 童人とまの風

谷川・白毛門沢、赤谷川本谷、奥秩父・大荒川谷、飯豊・長走川杉ノ沢～大面沢、苗場・熊ノ沢、万太
郎谷井戸小屋沢右俣、奥秩父・竜喰谷ほか

◎とまのかぜ No. 70 1998. 9 B5 45P 童人とまの風

丹沢・モロコボ沢、北岳バットレス4尾根、谷川・万太郎谷、日高・北戸蔦別～幌尻岳～ペテガリ岳、足尾・たに川大岩沢～三重泉沢、奥秩父・ナメラ沢、和賀・滝倉沢～小鷲倉沢～大鷲倉沢、利根川本流、楢俣川前深沢～狩小屋沢、奥多摩・水根沢、大源太北沢、大源太鷲ノ首沢、勘丹沢・四十八瀬川勘七ノ沢、丹沢太郎川大小ノ屋沢、神ノ川伊勢沢、船形・大倉川笹木沢ほか

◎山紫水明 No. 1998. 7 B5 14P 山旅の会

奥多摩・倉沢谷本谷、武尊沢ほか

◎山紫水明 No. 1998. 8 B5 24P 山旅の会

和賀・袖川沢竹ノ内沢、甑山ほか

◎すずらん通信 NO. 208 1998. 7 B5 16P 鈴蘭山の会

奥秩父・滝川慎ノ沢八百谷、那須・井戸沢の思い出ほか

◎すずらん通信 NO. 209 1998. 8 B5 26P 鈴蘭山の会

足尾・小田倉沢、那須・大蛇尾川西俣～東俣、足尾・大岩沢～三重泉沢～柳沢、奥只見・黒又川赤柴沢、蔵王・馬見ヶ崎川八方沢、大倉川笹木沢ほか

◎すずらん通信 NO. 210 1998. 9 B5 24P 鈴蘭山の会

南ア・奥沢谷南ダル左又、越後・大源太鷲ノ首沢、三国川栃の木沢、火打岳大横川、神室・大横川、谷川・万太郎谷、東黒沢～ナルミズ沢、大檜沢～ミチギノ沢～御神楽沢、南会津・黒桧沢～御神楽沢、朝日・難波温泉～大鳥沢西股～東大鳥沢～大鳥池、八久ダム～中俣沢～狐穴小屋～大鳥池ほか

◎溪游 NO. 100 1998. 4 B5 10P 溯行同人溪游会

比良・蛇谷ヶ峰灰処谷、奥美濃・損斐川金丸谷、若狭・耳川ウツロ谷、六甲・摩耶東谷ほか

会報

◎ハヶ岳日ノ岳ルンゼ雪崩事故報告書 1998. 9 A4 31P わらじの仲間

事故の概要、パーティとしての反省と教訓、メンバー個々の反省と教訓、参考資料、謝辞、救助活動費用他内訳、参考文献、おわりに、報告書作成を終えて

◎年報とまのかぜ No. 5 1998. 7 B5 282P 童人とまの風

ミニ特集・二口山塊の沢として大行沢本流、二口沢小松原沢、穴堂沢鹿打沢など10本。無雪期の山は越後・南会津・上越として会越・叶津川小三本沢、巻機・五十沢下ノ滝沢、谷川・マチガ沢トンネルルンゼなど29本東北の山として白神・笹内川など7本。ハヶ岳・北ア・南アとして北ノ俣谷など7本。関東・中部以西として西表島浦内川板敷川～ユツン川、フィリッピン・アボ山など26本。雪の山は越後・南会津として飯豊・石転び沢山スキーなど16本。東北として八甲田山スキーなど8本。ハヶ岳・北ア・南アとして頸城・焼山北面台地山スキーなど7本。関東・中部として西上州・貧乏神の氷瀑など3本。ほか新人紹介など

以上閲覧したい人は本図まで。

《編集後記》

ある夜、“シェルバ・極限の世界を生きる＝ヒマラヤ登山を支えた男達＝”というテレビ番組をみた。

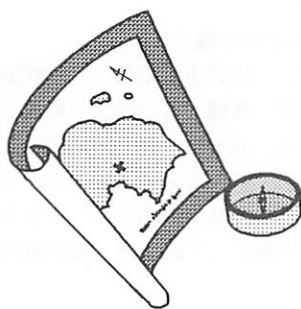
登山家（登山隊）がヒマラヤの頂に挑み始めたのが20世紀始め、それからおよそ80年の間彼らを支えてきた男達がシェルバと呼ばれる人達であった。酸素が極端に薄くなる所で重い荷物を担ぎ上げたのは彼らであった（シェルバとはシェルバ族という高所に強い山岳民族が雇われた事からその名が定着したらしい）。そのシェルバの中で有名なのはテンジン・ノルゲイ、この名前を記憶している人は多いと思うがエドモンド・ヒラリーと共にエベレストを初登頂した事で有名では有る。

シェルバはクライミング・シェルバ、ボーダー、コック、キッチンボーイで構成され、これらのシェルバのリーダーをサダーと呼ぶ。テンジンはクライミング・シェルバだった。ヒマラヤ初登頂、遠征隊にはなくてはならない人材である。彼らはそれを生業にしている。命をかけた生業である。我々も山が好きで山をやっているが、果たしてそれが生業になったらどうだろうか…？。

この放送でサダー（名をアンプルバという）のシェルバ仲間は同じ村の出身者でそれも身内が多いとのこと。死と隣り合わせの仕事の中でみんなを統率し引っ張っていく事の難しさからだろう、やはり最後は気心の知れた者同志と言う事だと思う。シェルバの仕事でもそうなのであるから、今の山岳会が停滞期に有るのも分かる気がする。同じ気持ち、同じ価値観、そして同じ時代を生きた者同志で初めてチームの和が出来るのだろう。特に命をかけた物事には…………。

以前、ヒマラヤに行ったときに感じたシェルバ達のプロ意識と屈託のない笑顔はそんな背景が有ったかとテレビを見ていて思ったのだった。そんなシェルバ達の視線から見たヒマラヤもあるのである。我々は初登頂すればそれは名誉になるが、彼等は仕事の一つにしかない。彼等に名声は投げかけられない。それでも今日もどこかの登山隊と共にヒマラヤに登っているだろう。そんな彼らの顔を見ていたら又彼等に逢いたくなってきた。暇を見つけて又行ってみようかな…………。

（編集長）



季報[R&V]第30号 発行1998年 夏 発行者：鯉河仁志
発行所：ACC-J 茨城 〒306-0501 茨城県猿島郡猿島町逆井318
生井一男方

編集者：生井一男
印刷所：やさと印刷



岩壁、沢、冬山のクライミング集団